



325  
215



始





*Phyllis*

325  
215



左近義弼譯編



耶蘇傳

大正  
3. 4. 1  
丙交

東京

聖書改譯社



謹告

予の恩人森村市左衛門翁が、近頃、他の宗教に異れりとして、大に耶蘇教に心を傾け居らるるを祝したき予の希望を容れ、且予の事業を助成せんとして、此度、森村開作氏の主唱にて、森村市左衛門・森村豊明會大倉孫兵衛村井保固福澤桃介和田豊治大倉文二の諸氏、相互に資を投せられ、その祝賀記念物として、此「耶蘇傳」を出版するに至れるは、予の深く感謝する所なれども、而もその感謝の意を表するの言なきに苦むのみ。唯今後、彌勵み、益努めて、十數年の間に、聖書全部を譯編し、かくて、眞理を明に證し、生命を廣く傳へ、人をして、人の人たるべき人たらしむるに補し、以て、日に新に、又日に新なる舊友の恩に報いんと欲し、聊出版の祝辭



に代へて、かく謹告し、かく感謝する所以なり。  
 次に、讀者に告ぐべき事二あり。一は、譯編者の研究未だ足らざる所より、耶蘇の言行を配置するに當りて、屢その順序を轉倒せるやも計り難き事と、一は、各福音記者の筆勢語氣をば、成るべく其儘に寫さんと努めたる所より、或は邦語の慣例を破れる恐れなしとせざる事となり。されど、尙聖書全部の譯編を完成する迄に、幾多の改訂を施すべければ、讀者幸に諒察せられて、細大洩さず、批評助言せられんことを、切に願ひて止まざる者なり。

一千九百十四年一月十六日 (心計りの祝日なる妻の第三十七誕辰)

譯編者

新約聖書 耶蘇傳凡例

- 一、各項の名稱番號等は、譯編者の附したるもの。
- 二、各項の名稱に附する括弧中に (マタイ二) と有れば、「マタイの傳へし福音書」第一章一節より十二節までのこと。
- 三、ゴシック文字は、聖名を示す。
- 四、丸括弧( )中の分は、譯編者の補足せるもの。
- 五、角括弧〔 〕中の分は、代名詞の誰なるや、不明瞭なる場合に、その固有名詞を代用せるもの。
- 六、點線……は、無言の深意、或は言語の足らざるを示す。
- 七、細字の分は、原著者、或は原編纂者等の加へたる註釋とも見



八。漢字に片假名を附せるは、原意原名等に適譯ならざるを恐れ、原語の音を示せるものなれども、必ずしもその振假名通りに發音するに及ばず、假令は「世」の字に「コスモ」或は「オイクローメネー」或は「アイオン」等の振假名ありとも、普通漢字の音訓にて讀下して可なり。

聖書 耶蘇傳緒言

新約聖書 耶蘇傳緒言

この「新約聖書耶蘇傳」は、ヒブリア文學に照して、ヘレン語より譯出し、四福音書全部に使徒行傳、コリント前書の十數節を加へて、編成せるものなり。

第一。マルコの傳へし福音書は、凡そ紀元五十年頃までのペトロの説教、同五十七八年頃までの目撃者等の證言、同六十年頃發行のマトイの聖訓集、同六十三四年頃までのパウロの書翰、同六十七八年頃までのイェルサレム教會の諸傳説等を綜合して、同七十年頃に發行せられたるものならん。

著者は、耶蘇を「ロトマ」社會に知らしめんとせしものと見え、敢



てユダヤ人等の舊習などに拘泥せず、直截簡潔なる言語にて、人の慰安者・友人としての耶蘇の行動を、最も秩序正しく傳記的に記載せり。

第一。マタイの傳へし福音書は、或はマルコの傳へし福音書にマタイの聖訓集へレン譯を合せ、更に目撃者等の證言に由れる諸種の短き福音書及び初代教會の諸傳説等を加へて、紀元七十五年より八十年頃までに、發行せられしものならん。

著者は七・五・四・三等の數を用ふるにても知らるる如く、ヒブリア思想に充てる者にて、モーセ律を固守せるユダヤ社會に於て、舊約のメシヤなる、而も人類の最大教師なる耶蘇を信せしめんよせしものなるべく、傳記としてよりも、寧ろ教訓として見るべきものならん。

第二。ルカの傳へし福音書は、マルコの傳へし福音書とマタイ

の聖訓集へレン譯とに、短き福音書等を加へて編成し、紀元八十四年より九十年頃までに發行せられしものならん。

著者の圓熟せる筆と豊富なる言とは、その文學の人なりしを察せしめ、特に醫學上の用語に滿てるを見れば、慥にパウロに伴ひし醫師ルカたりしことを信せざるを得ざらしむ。

勿論、紀元七十年イェルサレム陥落後の事とて、著者はユダヤの一小社會を出でて、廣く全世界に讀者を求め居りしは明なり。併し歴史か記録として、セオフロの爲に書列ねたりと言へるも、素より正確なる傳記にも非ず、さればとて、單に教訓集にも非ず、殆ど比喩的とも稱すべき詩集にて、小兒、特に病兒、婦人、特に寡婦、貧者、特に旅人か乞食等の最大福音たるなり。

第四。ヨハネの傳へし福音書は、文學として、四福音書中、最



も單純なれども、その思想に於ては、最も深遠なるものなり。葡萄の蔓、或は活ける水、或は生命のパンの如き、至て僅少の單語をも、即妙に寓意的に用ひて、哲學上の深遠なる思想を現せるは、著者の最も靈的實驗に富み、何れも默想信念等の凡ならざるを證し、一世紀より二世紀に移らんとせるに際し、教會の滅亡を免れしめんとして、耶穌の神の子メシヤなる事と、人類の救主なる事とを宣揚せしものならん。

右の如く、四福音書とも、各自その特質を異にすれども、何れも耶穌の言行を明にし、耶穌の人性と神性とを認識し、かつ初代教會の避く可らざる實際の必要に迫られて、記述せしことは同一なりしなりとす。

第五、かくてマルコは至極簡潔直截、而も活動寫眞的

に、耶穌の行動を活躍せしめて、教訓や教理を避けたるは、學者ならざる一般人民の爲なるべし。故に此を「通俗福音書」と稱するも可ならん。

マタイは徹頭徹尾、教育福音書なり。耶穌の教訓を主眼として配列せるは、耶穌の言行を傳ふる爲に、廣く初代の教會に於て用ひられたる教材必携書たりしならん。

ルカは、人道的社會的福音書なり。最も明に、富者と貧民、治者と民衆とを區別せるものなり。かくて各個人は、單に神に對するのみならず、尙又人に對しても、親愛同情盡力等の義務責任ある者として、社會問題に關する耶穌の教訓を、最も明白にせり。

ヨハネは、哲學的教理的福音書なり。その大主眼は、初代の教會の爲に、根本的教理を確立し、耶穌の品性言行を、宇宙的哲學的に



解釋せるものなり。

上述の如く、四福音書は、各自、その特色を發揮して、何れも、耶蘇を、前後左右より眺めたる事とて、その記載するところ、相互に齟齬することさへ少からずと雖も、その異同の存する邊に、反て耶蘇の容姿を活躍せしむること、甚だ多しとす。恰も富士山を眺望するに、春夏秋冬晴雨朝夕の景色を異にし、天文・歴史・地理・地質・動物・植物等の研究眼を以てしたるが如し。その相違せる點の多なるは、益々富士の實相を捉ふるに便なりと知るべし。四福音書の耶蘇を傳する、正に斯の如きものなり。

第六。凡そ人の傳記なるものは、必ずや其人の死後、まづ其人の親戚朋友弟子等に依りて、目撃せし事實を聞糺し、而して之を編成するものなれども、その傳記者の集蒐せんとする史料た

る傳説が、何れも傳せんとする其人の生存時代を離るるの遠近、渴仰者等の欲求等に準じて、口碑に色彩の濃淡あるは、蓋し止むを得ざる事實ならん。

耶蘇傳の如きも、耶蘇の復活後、或は四十年、或は五十年、或は六十年、或は七十年の其間に、傳播せられたる口碑を纏めて、編成せるものなり。故に最初に目撃者より傳へ傳へて傳へられたる間に、傳ふる人の個人性、傳へられたる時代の特徴に應じて、同じ耶蘇の言行にも、その重しとし、その貴しとする點に於て自然に大小の差異、無きを得ざるべし。これ四福音書の各自、獨得の光輝を放てる所以なり。而も諸傳説を綜合せる福音書にして、尙且右の次第なりとせば、況てその口碑の如き、その時代、その土地、その口にする男耳にする女に應じて、幾分の姿を變へ、



多少の色を帯ぶべきは、到底免れ能はざることならん。さればにや、數多く流れ出でし諸傳説も、概して新舊、或は南北の二源泉に遡ることを得べし。即ち新傳説は、南のエルサレムより發せるものにして、恐らくはパウロの如き、耶蘇の昇天後、靈體の耶蘇を見たる者より始まり、舊傳説は、北のガリラヤ山中より發せるものにして、ペツロの如き、耶蘇の復活前、受肉の耶蘇に交りたる者より始まりたるものならん。故に舊傳説に基ける記事は、その筆致、如何にも普通の自然的にして、新傳説に基ける記事は、その言明、幾分か超自然的に傾けるが如し。素より、自然と云ひ、超自然と云ふも、事實は正に同一なり。唯その説明を異にするのみ。假令ば、同じ草花にして、普通に之を「花が咲けり」と言ふべきを、靈的に之を「神が造れり」と言ふが如し。或は之を奇蹟とし、或は

之を奇蹟とせざる、何れもその人の如何に由るのみ。古今東西、萬事萬物、一として、奇蹟ならざるは無きものなり。或は此事を「奇蹟」と言ふ、これ見慣れざるが故なり。或は彼物を「奇蹟」と言はざる、これ屢聞き慣るるが故なり。奇蹟なり。凡て奇蹟なり。耶蘇の渾身、これ奇蹟なるのみならず、耶蘇の言行亦これ奇蹟ならざるは無きなり。而も奇蹟なるが故に、耶蘇を「神の子なり」と言ふに非ず。神の子なるが故に、奇蹟ならざるを得ざるのみ。耶蘇は人の目には、儘に奇蹟なり。されど、耶蘇自身に於ても、神に於ても、全く奇蹟に非ざるなり。そは人には、實に玄の玄、妙の妙なりと雖も、神と耶蘇とは、正に明明白白なればなり。

第七。斯の如く、奇蹟の人の子にして、自明の神の子なる耶蘇



を傳するは、口碑の言や、傳説の筆にて能し得らるべきものに非ず。普通の傳記や一般の歴史の企て及ぶべきものに非ず。必ずや言外に意を走らせ、紙背に姿を躍らしむるの詩歌に由らずんば能し得ざるなり。

舊約聖書の創世記より新約聖書の黙示録に至るまでを、悉く詩歌なりとする、これ畢竟其中に在る一個の記事一物の説明、何れも天文以上に廣大、地理以上に整然、歴史以上に確實なるが故なり。天文・地理・歴史、何れも有限無常の形影を捉ふるに止まれども、詩歌は永遠不朽の實在を寫せばなり。天文・地理・歴史、何れもこれ動かざる形の言にて書かるれども、詩歌は活ける生命の言にて語はるればなり。鳴響けばなり。

今この「新約聖書耶蘇傳」を發行するに當り、唯恐る、それ譯

編者の未熟なる、或は脱漏も有らん、誤譯も有らん。或は編纂の順序を失する亦更に甚しきことならん。而も此等をも顧みずして、此舉を敢てせるは、聊にても活ける耶蘇を、活ける言の詩歌をして語らしめんと欲すればなり。即ちヘレン語のヒブリ想をば、成るべくヒブリ語の韻律に照せる詩歌として、和譯せる所以なり。左にマタイの傳へし福音書第二十五章三十一節より四十六節までの「終末の大審判」なるヘレン語の一大比喻を、ヒブリ語の一大詩歌として、對出し、讀者の參考に供せんとす。これ徒に好奇心に訴ふるに非ずして、元來聖書の詩歌なるが故に、始めて神の眞理の活ける生命の言たるを、最も強く深く證せんと欲するに外ならざるなり。願はくは讀者と共に、生命の言を、生命にて讀み、耶蘇に於て神に活くるを得んことを。アーメン！



ὑμῖν, ἐφ' ὅσον ἐποίησατε ἐνὶ τούτων  
τῶν ἀδελφῶν μου τῶν ἐλαχίστων,  
41 ἐμοὶ ὑποποιήσατε. τότε ἔρει καὶ τοῖς  
ἐξ ἐπιπέμων, Πορεύεσθε ἀπ' ἐμοῦ,  
κατηραμένοι, εἰς τὸ πῦρ· τὸ αἰώνιον  
τὸ ἠτοιμασμένον τῷ διαβόλῳ καὶ  
42 τοῖς ἀγγέλοις αὐτοῦ. ἐπίνασα γάρ,  
καὶ οὐκ ἐδώκατέ μοι φαγαῖν·  
ἐδίψησα, καὶ οὐκ ἐποίησατέ με·  
43 ζῆνος ἦμην, καὶ οὐ συνηγάγετέ με·  
γυμνός, καὶ οὐ περιεβάλετέ με·  
ἀσθενής, καὶ ἐν φυλακῇ, καὶ οὐκ ἐπι-  
44 σκεψασθέ με. τότε ἀποκριθήσονται  
καὶ αὐτοὶ λέγοντες, Κύριε, ποτε σε  
εἶδομεν πεινῶντα, ἢ διψῶντα, ἢ  
ζῆνον, ἢ γυμνόν, ἢ ἀσθενῆ, ἢ ἐν  
φυλακῇ, καὶ οὐ διηκόησαμέν σου;  
45 τότε ἀποκριθήσεται αὐτοῖς λέγων,  
Ἄμην λέγω ὑμῖν, ἐφ' ὅσον οὐκ ἐποι-  
ήσατε ἐνὶ τούτων τῶν ἐλαχίστων,  
46 οὐδὲ ἐμοὶ ὑποποιήσατε. καὶ ἀπολεί-  
πονται οὗτοι εἰς κόλασιν αἰώνιον,  
οἱ δὲ δίκαιοι εἰς ζῆν αἰώνιον.

緒  
言

III

ἀπὸ τῆς τῆς πνεύματος  
ἐπιπέμων ἢ ἐπιπέμων  
ἀπὸ τῆς τῆς πνεύματος  
καὶ ἐπιπέμων  
ἀπὸ τῆς τῆς πνεύματος  
καὶ ἐπιπέμων

31 Ὁταν δὲ ἔλθῃ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ἐν  
τῇ δόξῃ αὐτοῦ, καὶ πάντες οἱ ἄγγελοι  
32 μετ' αὐτοῦ, τότε καθίσει ἐπὶ θρόνου  
δόξης αὐτοῦ, καὶ συναχθήσονται ἐμπρο-  
σθεν αὐτοῦ πάντα τὰ ἔθνη, καὶ ἀφοριεῖ  
αὐτοὺς ἀπ' ἀλλήλων, ὡς περὶ ὁ ποιμὴν  
ἀφοριεῖ τὰ πρόβατα ἀπὸ τῶν ἐρίφων,  
33 καὶ στήσει τὰ μὲν πρόβατα ἐκ δεξιῶν  
αὐτοῦ, τὰ δὲ ἐρίφια ἐξ ἐπιπέμων.  
34 τότε ἔρει ὁ βασιλεὺς τοῖς ἐκ δεξιῶν  
αὐτοῦ, Δεῦτε, οἱ εὐλογημένοι τοῦ  
πατρὸς μου, κληρονομήσατε τὴν ἠτοι-  
μασμένην ὑμῖν βασιλείαν ἀπὸ κατα-  
35 ρολῆς κόσμου. ἐπίνασα γάρ, καὶ ἐδώ-  
κατέ μοι φαγαῖν· ἐδίψησα, καὶ ἐποίη-  
σατέ με· ζῆνος ἦμην, καὶ συνηγάγετέ  
36 με γυμνός, καὶ περιεβάλετέ με· ἐπι-  
σκέψασθε, καὶ ἐπισκεψασθέ με· ἐν  
φυλακῇ ἦμην, καὶ ἦλθετε πρὸς με.  
37 τότε ἀποκριθήσονται αὐτοῖς οἱ δίκαιοι  
λέγοντες, Κύριε, ποτε σε εἶδομεν  
πεινῶντα, καὶ ἐσρέψαμεν; ἢ διψ-  
38 ῶντα, καὶ ἐποίησαμεν; ποτε δὲ  
σε εἶδομεν ζῆνον, καὶ συνηγάγομεν;  
39 ἢ γυμνόν, καὶ περιεβάλομεν; ποτε  
δὲ σε εἶδομεν ἀσθενῆ, ἢ ἐν φυλακῇ,  
40 καὶ ἦλθομεν πρὸς σε; καὶ ἀπεκρίθησθε  
ὁ βασιλεὺς ἔρει αὐτοῖς, Ἄμην λέγω

緒  
言

III



31 כבוא בן אדם בכבודו

וכל המלאכים עמו

וישב על כסא כבודו

32 ונאספו לפניו כל העמים

והפרידם איש מאחיו

כהפריד הרעה הכבשים

מהעתודים

והציב הכבשים על ימיו

והעתודים על שמאלו

34 ואמר המלך לאשר על ימיו

לכו ברוכי אבי

רשו הממלכה הנכונה לכם

ממוסדות תבל

35 כי רעב הייתי ותאכילוני

צמא הייתי ותשקוני

גר הייתי ותאטפוני

36 עירום ותלבישוני

חלה הייתי ותפקדוני

בית כלא הייתי ותבואו אלי

37 וענו אליו הצדיקים לאמר

אדוני

מתי ראינוך רעב ונסעדך

או צמא ונשקך

38 מתי ראינוך גר ונאספך

או עירום ונלבישך

39 מתי ראינוך חלה ונפקדך

או בית כלא ונבוא אליך

緒言

一四

וענה המלך ואמר אליהם

אמן אמרתי אליכם

אשר עשיתם לאחד

אחי אלה הצעירים

גם לי עשיתם

40 אז יאמר גם לאשר על שמאלו

לכו מעלי הארורים

אל אש עולם

41 הנכונה לשטן ולמלאכיו

כי רעב הייתי ולא האכלתוני

צמא הייתי ולא השקיתוני

42 גר הייתי ולא אפפתוני

עירום ולא הלבשתוני

43 חלה ובית כלא ולא

וענו גם הם לאמר

אדני

44 מתי ראינוך רעב וצמא

וגר ועירום וחלה ובית כלא

ולא שרתנו לך

45 וענה אליהם לאמר

אמן אמרתי אליכם

אשר לא עשיתם לאחד

46 אחי אלה הצעירים

גם לי לא עשיתם

והלכו אלה למוסר עולם

והצדיקים לחיי עולם

緒言

一五



一千九百十三年七月十日

東京青山長者丸にて

空念左近義弼

新約聖書 耶蘇傳緒言 をはり

新約聖書 耶蘇傳目次

第一章 緒論

- 一 序言 (ルカ 一の二―四) (一)
- 二 洗者ヨハネに就ける豫告 (ルカ 一の五―一二) (二)
- 三 マリヤへの託宣 (ルカ 一の三―八) (二)
- 四 ヨセフへの託宣 (マタイ 一の二―五上) (二)
- 五 マリヤのエリサベト訪問 (ルカ 一の三―五) (二)
- 六 洗者ヨハネの誕生 (ルカ 一の七―八) (二)



第二章 耶蘇の誕生及び幼時

一	耶蘇の系圖 (マタイ 一の二一―二七、ルカ 三の二三―三三)	二七
二	耶蘇の誕生 (マタイ 二の二―五下、ルカ 二の―七)	三二
三	ベスレヘム郊外の牧者 (ルカ 二の八―二〇)	三四
四	嬰兒の切禮 (ルカ 二の二―四)	三七
五	シメオンとハナ (ルカ 二の二五―三八)	三八
六	東方の博士 (マタイ 二の―一二)	四一
七	エジプト避難 (マタイ 二の二―八)	四三
八	エジプトより歸る (マタイ 二の一九―二三、ルカ 二の三九―四二)	四五
九	ナザレ住居 (ルカ 二の四〇―五二)	四七

第三章 宣敎の準備

一	洗者ヨハネの傳道 (マタイ 三の―一八、ルカ 三の―二二)	五
二	耶蘇の洗禮 (マタイ 三の九―一二、ルカ 三の二―七)	六二
三	耶蘇の誘惑 (マタイ 四の―一二、ルカ 四の―一―三)	六五
四	洗者ヨハネの證明 (ヨハネ 一の九―三四)	七二
五	最初の弟子 (ヨハネ 一の三五―五一)	七八
六	カナの婚禮 (ヨハネ 二の―一二)	八二
七	カファルナフム住居 (マタイ 四の二―一六、ヨハネ 二の二―二)	八五
八	漁夫の弟子入 (マタイ 四の―一六―二〇、ルカ 五の―一―七)	八六
九	カファルナフムの會堂にて教ふ (マタイ 一の二―二八、ルカ 四の三―三七)	九一



一〇 ベツロの姑 (マルコ 一の二九―三四、  
ルカ 四の三八―四一、七) 九五

一一 癩病及び中風患者 (マルコ 一の四〇―二の二一―八、  
ルカ 五の一二―二六、九の二―八) 九八

一二 税吏マタイ (マルコ 二の二―一三、  
ルカ 五の二七―三二) 一〇九

一三 耶蘇 ユダヤに入る (ヨハネ 三の  
二―三〇) 一一四

一四 ニコデモの質問 (ヨハネ 三の  
一―三六) 一二六

第四章 ガリラ宣教

一 ガリラ巡回 (マルコ 一の二―一五、  
ルカ 四の二―一五、ヨハネ 一の  
一―三) 一二五

二 断食に関する論争 (マルコ 二の  
一八―二二、ルカ 五の三三―三九) 一三〇

三 弟子等と安息日 (マルコ 二の  
二七―二八、ルカ 六の二―五) 一三六

四 萎えたる手 (マルコ 三の  
一―六、ルカ 六の九―一四) 一四二

五 耶蘇の名聲 (マルコ 三の  
七―一二、ルカ 六の二七―二九) 一四七

六 十二使徒 (マルコ 三の  
一三―一七、ルカ 六の二―一六) 一五一

七 山上の垂訓 (マタイ 五の  
一―一三、ルカ 六の二―一七) 一五四

八 百夫長の僕 (大臣の子) (マタイ 八の  
五―一三、ルカ 七の一二―一七) 二二六

九 ガインの寡婦の子 (ルカ 七の  
一―七) 二二四



一〇	洗者ヨハネの質問 (マルタイ七の一八—二二)	二二六
一一	洗者ヨハネに関する証言 (マルタイ七の二四—二八、一六の三一—三六、七の二九—三五)	二二九
一二	耶蘇の辯明 (マルコ九の三〇—三三、一の二四—二五、一七—二二、二の二二—二四上、三六—三七)	二三六
一三	奇蹟に関する訓戒 (マルタイ一の二六—二九、二の二四—二六、三の二六—二八、四の二六—二八、五の二六—二八)	二四七
一四	眞の親戚 (マルコ三の三一—三五、一の二七—二八)	二五二
一五	比喩的教訓 (マルコ四の二一—二四上、二五—二四、一の二六下、一三の二四—二五、二の二八—二九)	二五六
一六	耶蘇の風波を鎮む (マルコ四の三五—四一、一の二九—三〇)	二八七
一七	ゲラサの狂人 (マルコ五の二—七、一の二八—三〇)	二九二
一八	ヤイルの娘と血漏の女 (マルコ五の二—七、一の二八—三〇、ルカ八の四〇—四三)	三〇六

一九	洗者ヨハネ 殺さる (マルコ六の一四—二九、ルカ九の七—九、三の二九—三〇)	三一四
二〇	十二使徒の派遣 (マルコ六の六—一〇、九の四—六、一の二二—二四、二の二二—二四、三の二二—二四、四の二二—二四、五の二二—二四、六の二二—二四、七の二二—二四、八の二二—二四、九の二二—二四)	三二二
二一	弟子等を募り幕張祭に赴かしむ (ヨハネ一の九—一七)	三四九

第五章 ユダヤ及びベリヤ宣教

一	耶蘇 幕張祭に臨む (ヨハネ七の二〇—二五)	三五二
二	ベスザイスの池 (ヨハネ一〇の四—七)	三七七
三	マリタとマリヤ (ルカ一〇の二—三、三の二—三)	三八八
四	七十二人の派遣 (マルタイ一〇の二〇—二四、ルカ一〇の二〇—二四)	三九〇



四	...	三九〇
五	耶蘇、パリサイ人の家にて食す	四〇二
六	處世の心得	四二〇
七	ガリラヤ人、ピラトに殺さる	四三〇
八	十八年間の病婦	四三三
九	全人類の福音	四三五
一〇	耶蘇、獻堂祭に臨む	四三七
一一	ああ、エルサレム!	四四二
一二	生來の盲人	四四五
一三	牧者と羊	四五七

一四	水腫病者	四六二
一五	失せたる羊	四六六
一六	失せたる貨幣	四六九
一七	放蕩子息	四七〇
一八	不正なる家令	四七六
一九	富者とラザル	四八〇
二〇	寛恕	四八六
二一	ラザルの蘇生	四九四
二二	姦淫罪の女	五〇四
二三	耶蘇、エフライムへ退く	五〇七
二四	サマリヤの女	五〇九
二五	耶蘇の食物	五一六



二六	福音のサマリヤに弘まる	(ヨハネ 四の二八下 一三〇・三九―四三)	五一八
二三	福音第六章	ガリラに於ける危機	五〇四
二一	耶蘇 故郷にて拒絶せらる	(マルコ 六の一―六上 マタイ 一三の五四―五八 ルカ 四の六一―三〇 ヨハネ 四の四四―四五)	五二一
二〇	耶蘇 フイニキヤへ赴く	(マルコ 七の二四―三〇 マタイ 一五の二―二八)	五三〇
一三	耶蘇 デカボリへ赴く	(マルコ 七の三一―三七 マタイ 一五の二九―三一)	五三四
四	謙遜の選	(マルコ 九の三三―三七・四二 マタイ 八の二―六・一〇―一一 ルカ 九の四六―四八上、一七の二)	五三七
五	五千人に食せしむ	(マルコ 六の三〇―四四 マタイ 一四の一二―一七 ルカ 九の一二―一七 ヨハネ 六の一二―一五)	五四二
六	耶蘇 水上を歩む	(マルコ 六の四五―五二 マタイ 一四の二二―三三 ヨハネ 六の二―一二上)	五五六

二七	耶蘇 ダネサレに到る	(マルコ 六の五三―五六 マタイ 一四の三四―三六 ヨハネ 六の二―下)	五六〇
二八	生命のパン	(ヨハネ 六の 二二―六五)	五六三
二九	四千人に食せしむ	(マルコ 八の一一―二〇 マタイ 一五の三一―三九)	五七四
二〇	時期の證徴	(マルコ 八の一一―二二 ルカ 一一の五四―五七・一―下)	五七八
二一	洗はぬ手	(マルコ 七の一一―一五・一七―二三 マタイ 一五の一一―一四上・一五―二〇)	五八六
二二	ペスサイダの盲人	(マルコ 八の 二三―二六)	五九六
二三	受難に就ける豫告第一	(マルコ 八の二七―三三 マタイ 一六の二三―二五 ルカ 九の一一―一三 ヨハネ 六の六六―七一)	五九七
一四	耶蘇信者の覺悟	(マルコ 八の三四―九の一 マタイ 一六の二四―二八 ルカ 九の二三―二七)	六〇七
一五	耶蘇の變貌	(マルコ 九の二―一三 マタイ 一七の二―一三 ルカ 九の二八―三六)	六二五
一六	癩癩の男兒	(マルコ 九の一四―二九 マタイ 一七の一四―二二 ルカ 九の三七―四三上、 マタイ 一七の五一―六)	六二三



一七	受難に就ける豫告第二	(マルコ 九の三〇―三二、 マタイ 一七の二二―二三、 ルカ 九の四三下―四五)	六三二
一八	魚口内のシケル	(マタイ 一七の二四―二七)	六三五
一九	ヨハネの嫉妬心	(マルコ 九の三八―四〇、 ルカ 九の四九―五〇)	六三六
二〇	耶蘇 イェルサレムへ向ふ	(マルコ 一〇の一―二、 マタイ 一九の一一―一二、 ルカ 九の五一―五六、 ヨハネ 一〇の四〇―四二)	六三九
二一	人の子に 家無し	(マタイ 八の一九―二二、 ルカ 九の五七―六二)	六四一
二二	十人の癩病患者	(ルカ 一七の九)	六四五
二三	サマリヤの善人	(ルカ 一〇の三七)	六四七
二四	祈禱の態度	(ルカ 一四)	六五〇
二五	離縁を禁ず	(マルコ 一〇の二―二二、 マタイ 一九の三―二二)	六五四
二六	耶蘇と幼児	(マルコ 一〇の一三―一六、 マタイ 一九の一三―一五、 ルカ 一八の二五―二七)	六六〇

二七	富める青年	(マルコ 一〇の一七―三〇、 マタイ 一八の一六―二九)	六六三
二八	葡萄園の雇主	(マルコ 一〇の三一―三六、 マタイ 二〇の一―九)	六七七
二九	受難に就ける豫告第三	(マルコ 一〇の三二―三三、 マタイ 一八の三―四、 ルカ 一八の三―四)	六八二
三〇	ヤコブ・ヨハネの空望	(マタイ 一〇の三五―四五、 ルカ 一〇の二―八、 九の四八下)	六八六
三一	イリコの盲人	(マルコ 一〇の四六―五二、 マタイ 一八の三五―四三、 ルカ 一八の二七―三一)	六九五
三二	耶蘇 ザクカイを訪ふ	(ルカ 一〇の二―九)	七〇一
三三	マネビダラント	(マタイ 二五の二四―三〇、 ルカ 一八の二―八)	七〇三

第七章 受難週



目次

一	過越祭前のベスアニヤ滞在	マルコ 一四の三―九 マタイ 七の三六―一〇 ヨハネ 一一の五―一〇	七一四
二	メシヤの入京	マルコ 一一の一一―一四 マタイ 一九の二九―四一 ヨハネ 一二の一二―一九	七二八
三	無花果樹 呪はる	マルコ 一一の二一―二四	七四二
四	耶蘇 宮を潔む	マルコ 一一の二五―二七 マタイ 一九の四五―四八 ヨハネ 一二の二三―二五	七四四
五	無花果樹 枯る	マルコ 一一の二〇―二四	七五一
六	耶蘇の權威に就ける質問	マルコ 一一の二七―三三 マタイ 二二の二三―二七 ルカ 二〇の一一―一八	七五三
七	善惡の二子	マタイ 二二の二八―三二	七六〇
八	悪き小作人	マルコ 一二の三一―四六 ルカ 二〇の九―一九	七六二
九	婚筵の比喻	マタイ 一二の二二―四四 ルカ 一四の二五―四四	七七四

目次

一〇	パリサイ人の質問	マルコ 一二の二〇―二二 マタイ 二二の二〇―二二	七八二
一一	サドカイ人の質問	マルコ 一二の二二―二七 マタイ 二二の二七―三三 ルカ 二〇の二七―三三	七八八
一二	最大の命令	マルコ 一二の二八―三〇 マタイ 二二の二八―三〇 ルカ 一〇の二五―二八	七九七
一三	ダビドの子か主か	マルコ 一二の三五―三七 マタイ 二二の四五―四七 ルカ 二〇の四一―四四	八〇三
一四	寡婦のレプト	マルコ 一二の四一―四四 マタイ 二二の四一―四四 ルカ 二〇の四一―四四	八〇七
一五	ザイス山上の預言	マルコ 一三の一一―一三 マタイ 二四の一一―一三 ルカ 一三の三九―四一	八〇九
一六	十人の處女	マタイ 二五の二―十	八四八
一七	最終の大審判	マタイ 二五の二五―三二 ルカ 一三の三二―三九	八五一
一八	ユダと祭司長	マルコ 一四の一一―一六 マタイ 二六の一一―一六 ルカ 二二の一一―一六	八五六



一九	希臘人の面謁 <small>(ヨハネ二二〇・二二五)</small>	八六〇
二〇	最後の晩餐の準備 <small>(マルコ二四の二七・二九)</small>	八六九
二一	最後の晩餐 <small>(マルコ二四の二七・二九)</small>	八七四
二二	弟子等の離散を豫告す <small>(マルコ一四の二七・三一)</small>	八九三
二三	耶蘇の告別 <small>(ヨハネ一五、一六、一四)</small>	九〇三
二四	告別祈禱 <small>(ヨハネ一七)</small>	九三五
二五	ガスシムナーの園 <small>(マルコ一四の二六・三二)</small>	九四六
二六	耶蘇の捕縛 <small>(マルコ一四の四三・四五)</small>	九五五

二七	議會の審問 <small>(マルコ一四の五三・六五)</small>	九六七
二八	ペツロの否認 <small>(マルコ一四の六六・七二)</small>	九八〇
二九	ユダの死 <small>(マタイ二七)</small>	九八七
三〇	ピラトの審問 <small>(マルコ一五の一一・一四)</small>	九八九
三一	耶蘇をヘロデに送らる <small>(ルカ二二)</small>	九九八
三二	ピラト 耶蘇を赦さんとす <small>(マルコ一五の六一・一九)</small>	一〇〇〇
三三	ピラトの再審問 <small>(ヨハネ一九)</small>	一〇〇〇
三四	ダゲレスへの途上 <small>(マルコ一五の二〇・二二)</small>	一〇一七
三五	十字架 <small>(マルコ一五の二三・二四)</small>	一〇二〇



三六	耶蘇の死	マルコ 一五の三三―四一 マタイ 二七の四五―五六 ルカ 二四の四四―四九 ヨハネ 一九の二八―三七	一〇三三
三七	耶蘇を葬る	マルコ 一五の四二―四七 マタイ 二七の五七―六一 ルカ 二四の五〇―五五 ヨハネ 一九の三八―四二	一〇四三
三八	兵士の護衛	(マタイ 二七の六二―六六)	一〇四八
三九	耶蘇の復活と昇天		一〇五〇
四〇	耶蘇の復活と昇天		一〇六四
四一	祭司长番兵等の密約	(マタイ 二八の二―一五)	一〇七二
四二	耶蘇 クレオバ等に現る	(ルカ 二四の二三―三五)	一〇七六
四三	耶蘇 マリヤ等に現る	(マタイ 二八の九―一〇 ルカ 二四の五五―五七 ヨハネ 二〇の一一―一八)	一〇七八
四四	耶蘇 十二人に現る	(ルカ 二四の三三下―三四 ヨハネ 二〇の二五―二七)	一〇八二

四五	耶蘇の昇天	(ルカ 二四の五〇―五三 使徒行 一の九―一一)	一〇八三
四六	弟子等の大使命	(マタイ 二八の一―二 ルカ 二四の四四―四九 ヨハネ 一の一二―一七)	一〇八四
四七	ヤコブ・パウロ等に現る	(コリント前 一の七―八)	一〇八五
四八	ガリラヤ山中、十一人に現る	(マタイ 二八の九―一〇)	一〇八六
四九	ガリラヤ湖畔、七人に現る	(ヨハネ 二一の一二―一七)	一〇八七
五〇	五百人以上に現る	(コリント前 一の五―六)	一〇八八
五一	ヨコブ・パウロ等に現る	(コリント前 一の七―八)	一〇八九
五二	耶蘇の昇天	(ルカ 二四の五〇―五三 使徒行 一の九―一一)	一〇九四

第九章 結論



一 ヨハネの結論(ヨハネ二〇の三〇—三三)

一〇九七

第十章 附 録 (後世の追加)

一 復活と昇天(マルコ二六)

一〇九九

二 結 論(異本マルコ六の九—一〇)

一〇八三

三 五百人以上の衆(マテ六)

一〇八二

四 七十人の衆(マテ十)

一〇八二

五 七十人の衆(マテ十)

一〇八二

六 聖書

一〇八二

新約聖書 耶蘇傳 目次をばり

略解

新約聖書 耶蘇傳

第一章 緒 論

一 序 言

(ルカ一の二—三—四)

(ヨハネ一)

1 さて御事の初より、親く視さかつ御言の役者と成

りし者等の、我等に傳へし如く、

1 正しく我等に於て、遂げられたる事物に就いて、

序言 (ルカ、ヨハネ)

ヨハネ

首(福音)



セオフィロ  
（神に愛さる  
る者神の友）

紀元前第十四  
世紀のエジプ  
ト王アメンホ  
テプ第四世即  
ちイタカソン  
の思想を繼げ  
るアレキサン  
ヅリヤ哲學の  
ロゴス以上  
の神格を供  
ふるに  
「神聖」は  
「神」も譯  
し得べし

或は一彼に於  
て成りし生命  
なりき

「押へ」壓倒。  
この緒論も  
言ふべき一  
一八は全福音  
書を縮寫せる  
ものなり。  
八の五八、一  
七の五五、二  
八、二〇の三  
八、二〇の二  
八、五の七、  
〇の二〇、五  
の二一、二六  
の二五、二六  
の二九、三〇  
の三三、三六  
の三九、四〇  
の四三、四四  
の四六、四七  
の五〇、五一  
の五三、五四  
の五七、五八  
の六一、六二  
の六五、六六  
の六九、七〇  
の七三、七四  
の七六、七七  
の七九、八〇  
の八三、八四  
の八六、八七  
の九〇、九一  
の九三、九四  
の九六、九七  
の九九、一〇〇  
の一〇三、一〇四  
の一〇六、一〇七  
の一〇九、一一〇  
の一一三、一一四  
の一一六、一一七  
の一二〇、一二一  
の一二三、一二四  
の一二六、一二七  
の一二九、一三〇  
の一三三、一三四  
の一三六、一三七  
の一三九、一四〇  
の一四三、一四四  
の一四六、一四七  
の一四九、一五〇  
の一五三、一五四  
の一五七、一五八  
の一六一、一六二  
の一六五、一六六  
の一六九、一七〇  
の一七三、一七四  
の一七六、一七七  
の一七九、一八〇  
の一八三、一八四  
の一八六、一八七  
の一八九、一九〇  
の一九三、一九四  
の一九六、一九七  
の一九九、二〇〇  
の二〇三、二〇四  
の二〇六、二〇七  
の二〇九、二一〇  
の二一三、二一四  
の二一六、二一七  
の二一九、二二〇  
の二二三、二二四  
の二二六、二二七  
の二二九、二三〇  
の二三三、二三四  
の二三六、二三七  
の二三九、二四〇  
の二四三、二四四  
の二四六、二四七  
の二四九、二五〇  
の二五三、二五四  
の二五七、二五八  
の二六一、二六二  
の二六五、二六六  
の二六九、二七〇  
の二七三、二七四  
の二七六、二七七  
の二七九、二八〇  
の二八三、二八四  
の二八六、二八七  
の二八九、二九〇  
の二九三、二九四  
の二九六、二九七  
の二九九、三〇〇  
の三〇三、三〇四  
の三〇六、三〇七  
の三〇九、三一〇  
の三一三、三一四  
の三一六、三一七  
の三一九、三二〇  
の三二三、三二四  
の三二六、三二七  
の三二九、三三〇  
の三三三、三三四  
の三三六、三三七  
の三三九、三四〇  
の三四三、三四四  
の三四六、三四七  
の三四九、三五〇  
の三五三、三五四  
の三五七、三五八  
の三六一、三六二  
の三六五、三六六  
の三六九、三七〇  
の三七三、三七四  
の三七六、三七七  
の三七九、三八〇  
の三八三、三八四  
の三八六、三八七  
の三八九、三八〇  
の三九三、三九四  
の三九六、三九七  
の三九九、四〇〇  
の四〇三、四〇四  
の四〇六、四〇七  
の四〇九、四一〇  
の四一三、四一四  
の四一六、四一七  
の四一九、四二〇  
の四二三、四二四  
の四二六、四二七  
の四二九、四三〇  
の四三三、四三四  
の四三六、四三七  
の四三九、四四〇  
の四四三、四四四  
の四四六、四四七  
の四四九、四五〇  
の四五三、四五四  
の四五七、四五八  
の四六一、四六二  
の四六五、四六六  
の四六九、四七〇  
の四七三、四七四  
の四七六、四七七  
の四七九、四八〇  
の四八三、四八四  
の四八六、四八七  
の四八九、四九〇  
の四九三、四九四  
の四九六、四九七  
の四九九、五〇〇  
の五〇三、五〇四  
の五〇六、五〇七  
の五〇九、五一〇  
の五一三、五一四  
の五一六、五一七  
の五一九、五二〇  
の五二三、五二四  
の五二六、五二七  
の五二九、五三〇  
の五三三、五三四  
の五三六、五三七  
の五三九、五四〇  
の五四三、五四四  
の五四六、五四七  
の五四九、五五〇  
の五五三、五五四  
の五五七、五五八  
の五六一、五六二  
の五六五、五六六  
の五六九、五七〇  
の五七三、五七四  
の五七六、五七七  
の五七九、五八〇  
の五八三、五八四  
の五八六、五八七  
の五八九、五九〇  
の五九三、五九四  
の五九六、五九七  
の五九九、六〇〇  
の六〇三、六〇四  
の六〇六、六〇七  
の六〇九、六一〇  
の六一三、六一四  
の六一六、六一七  
の六一九、六二〇  
の六二三、六二四  
の六二六、六二七  
の六二九、六三〇  
の六三三、六三四  
の六三六、六三七  
の六三九、六四〇  
の六四三、六四四  
の六四六、六四七  
の六四九、六五〇  
の六五三、六五四  
の六五七、六五八  
の六六一、六六二  
の六六五、六六六  
の六六九、六七〇  
の六七三、六七四  
の六七六、六七七  
の六七九、六八〇  
の六八三、六八四  
の六八六、六八七  
の六八九、六九〇  
の六九三、六九四  
の六九六、六九七  
の六九九、七〇〇  
の七〇三、七〇四  
の七〇六、七〇七  
の七〇九、七一〇  
の七一三、七一四  
の七一六、七一七  
の七一九、七二〇  
の七二三、七二四  
の七二六、七二七  
の七二九、七三〇  
の七三三、七三四  
の七三六、七三七  
の七三九、七四〇  
の七四三、七四四  
の七四六、七四七  
の七四九、七五〇  
の七五三、七五四  
の七五七、七五八  
の七六一、七六二  
の七六五、七六六  
の七六九、七七〇  
の七七三、七七四  
の七七六、七七七  
の七七九、七八〇  
の七八三、七八四  
の七八六、七八七  
の七八九、七八〇  
の七九三、七九四  
の七九六、七九七  
の七九九、八〇〇  
の八〇三、八〇四  
の八〇六、八〇七  
の八〇九、八一〇  
の八一三、八一四  
の八一六、八一七  
の八一九、八二〇  
の八二三、八二四  
の八二六、八二七  
の八二九、八三〇  
の八三三、八三四  
の八三六、八三七  
の八三九、八四〇  
の八四三、八四四  
の八四六、八四七  
の八四九、八五〇  
の八五三、八五四  
の八五七、八五八  
の八六一、八六二  
の八六五、八六六  
の八六九、八七〇  
の八七三、八七四  
の八七六、八七七  
の八七九、八八〇  
の八八三、八八四  
の八八六、八八七  
の八八九、八九〇  
の八九三、八九四  
の八九六、八九七  
の八九九、九〇〇  
の九〇三、九〇四  
の九〇六、九〇七  
の九〇九、九一〇  
の九一三、九一四  
の九一六、九一七  
の九一九、九二〇  
の九二三、九二四  
の九二六、九二七  
の九二九、九三〇  
の九三三、九三四  
の九三六、九三七  
の九三九、九四〇  
の九四三、九四四  
の九四六、九四七  
の九四九、九五〇  
の九五三、九五四  
の九五七、九五八  
の九六一、九六二  
の九六五、九六六  
の九六九、九七〇  
の九七三、九七四  
の九七六、九七七  
の九七九、九八〇  
の九八三、九八四  
の九八六、九八七  
の九八九、九九〇  
の九九三、九九四  
の九九六、九九七  
の九九九、一〇〇〇

序言 (ヘルカ、ヨハネ)

記録を作らんと、多数の者も企てし故、  
1 萬事を初より詳細に取調べたる我も、  
亦順序よく、汝に書くことを可と思へり。汝  
最も貴きセオフィロよ！  
4 これ汝を以て、その教へられたる言の確實  
なることを、明に識らしめんとてなり。

1 太初に、ロゴス 在りき。  
ロゴスは、神と共に在りき。

聖ロゴスは、一の神なりき。  
此は太初に、神と共に在りき。

凡ての物は彼を通じて成れり。  
彼を通せずして成れる物、一だも在らざりき。

彼に於て、生命有りき。即ち、  
生命は、人類の光明なりき。

而して、光明は闇黒に於て輝く。  
而も、闇黒は、其を押へざりき。

神の側より遣されたる人、現れぬ。  
彼の名は「ヨハネ」なりき。

序言 (ヨハネ)



四・一の二〇  
三の二八、七  
七の二五、九  
八の二六、七  
一の五三、七  
一の五〇、五  
二の二〇、五  
五の二五、六  
五の二四、六  
一の六、八  
一の七、八  
一の六、九  
一の七、九  
一の八、〇  
一の九、〇  
一の一〇、〇  
一の一一、〇  
一の一二、〇  
一の一三、〇  
一の一四、〇  
一の一五、〇  
一の一六、〇  
一の一七、〇  
一の一八、〇  
一の一九、〇  
一の二〇、〇

序言 (ヨハネ)

17 此は 証明にとて、來れり。  
これ 凡ての者をして、彼を通じて、信せしめんとて  
なり。

8 その彼は 光明に非ざりき。  
されど 光明に就いて、證明せんとなりき。

9 爰に 世に來れる眞の光明ありき。  
これ 有らゆる人を照す所のものなりき。

10 彼は 世に於て、在りき。  
而も 世は 彼を識らざりき。

「己の國はユ  
ダヤ國なり。  
己の民はイス  
ラエルなり。」

11 彼は 己の國に來れり。  
而も 己の民は 彼を受附けざりき。

12 されど 彼を受けし程の者！ 彼等に  
彼の神の兒等と成るの權利を與へぬ。  
彼等の名を信じ  
居る者等に

13 彼等は 血脈よりに非ず、肉の意よりに非ず、  
男の意よりに非ず、ただ 神より生れしなり。

14 而も 我等に於て、寓せり。

序言 (ヨハネ)



彼 恩寵と眞理とに満てり。

我等 彼の榮光を視ぬ。  
父よりの獨子の如き榮光

15 彼に就いて證明し、叫びて言へるは、

「我が後に來れる彼は非我が前に成れり。」

そは轉彼我が前に在ればなり。

かく言ひて彼は此ヨハネなりき。

16 而我等一同 彼の充實の中より受けぬ。

而も 恩寵に恩寵なりき。

モーセ (曳出す) イエス (救拯メシヤ) (油を塗られし者) 選ばれし者

ヘロデ (紀元前四十年より四十年まで) 下に在りては、王の義ならんは英雄の子にセカルヤ (十一年の記憶せらる者) アロン (開明、富有)

17 され 律法は、モーセを通じて與へられしかど、恩寵と眞理とは、イエス・メシヤを通じて臨みぬ。

18 神を見たる者も未だ一人だも在らざりき。對父の懷中に在る獨子を止その彼ぞ言明したる!

洗者ヨハネに就ける豫告 (ルカ五) 洗者ヨハネの大衆一同の授けし言ひ

程に、ヨダヤの王へ申す代、セカルヤと名づくる。アビサ班の或る祭司ありき。彼の妻は、アロンの娘にて、彼女の名は「モリサベト」なりき。さて、彼等兩人とも、ヤーエの凡百の命令と規律とに於て進み居りて

洗者ヨハネに就ける豫告 (ルカ)

七



エリサベト  
が神はわ  
の崇拝者  
ヤエ(實在、  
永遠の存在  
者)

エリサベト  
の崇拝者  
ヤエ(實在、  
永遠の存在  
者)

洗者ヨハネに就ける豫言(ルカ)  
過失 無く、**エ**神の前に、**義**き者なりき。汝されど、**エ**リサ  
ベトは**石**女なりしかば、**彼**等に、**兒**。無かりき。而し  
て、**彼**等兩人とも、**年**老い居たり。汝、**マ**ロンの銀  
1。さる程に、**彼**、その**班**の順にて、**神**の前に、**祭**司の勤  
務を行ひけるが、**祭**司職の慣例に従ひ、**籤**を抽きて、**ヤ**  
**エ**の堂に入り、**香**を焼くこと成りぬ。**香**を焼く時刻  
には、**人**民の大衆一同、**外**部にて祈り居たり。**爰**に、**ヤ**  
**エ**の**使**者、**香**壇の右に立ちて、**彼**に現れければ、**ゼ**カ  
**ル**に見て、**驚**き、未かつ**人**恐怖に打たれぬ。**ゼ**カ  
者、**彼**に向ひて、言へり。  
恐るること勿れ。汝、**ゼ**カ**ル**ヤ果へるべきものなり。

エリサベト  
の崇拝者  
ヤエ(實在、  
永遠の存在  
者)

民数記六の三  
サムエル前書  
一の二

「靈」はヒブ  
語のルイ  
アのヘレン  
語の「氣」  
なり。

それ、**汝**の**祈**願、**聞**入れられぬ！  
**汝**の妻**エ**リサベト、**汝**に**子**を産まん。  
**汝**、**彼**の名を「**ヨ**ハネ」と呼ぶべし。  
14 **彼**は、**汝**の喜悅たらん、**歡**樂たらん。  
**多**数の者も、亦、**彼**の**誕**生をば、**喜**ばん。  
15 **そ**は、**ヤ**エの**前**に、**彼**、**大**なるべければなり。  
而して、**彼**は、**葡**萄酒をも、**強**き酒をも、**飲**むまじ。  
16 **彼**、その母の胎内よりして、**聖**靈に、**満**されん。  
17 **彼**、**イ**スラエルの子の**多**数を、**神**、**ヤ**エに歸らしめん。  
**彼**、**エ**リヤの**靈**と力とに於て、**「ヤ**エの**前**に進まん。  
洗者ヨハネに就ける豫言(ルカ)



ガアリエルは吉報を齎す、使者は救拯の者、ミカエルは誰か神の如き者、即ち刑罰の使者。

（神の人は吉報を齎す、使者は救拯の者、ミカエルは誰か神の如き者、即ち刑罰の使者。）

洗者ヨハネに就ける豫告（ルカ）

これ 完備せる民を、ヤハエの爲に工備へんとてなり  
父の心を、子に歸らせ、不信者を、義人の知識に（歸らせん）とてなり

1<sup>18</sup> 爰に於て、ゼカルヤ 使者に向ひて、言へり。

何に由りてか、我此事を識るべき。君は老婦に、我自ら 老人なるに、わが妻も亦 老れたればなり。

使者 答へて、彼に言へり。我は 神の前に侍る、ガブリエルなり。

我汝に語りて、此等の事を、汝に告げん。汝の許に派遣せられぬ。

見よ、此等の事の成る日まで、汝黙すのみに、言ふこと能はじ。

このころ、その時期に及びて、成就すべき筈の、わが言を、汝に信せざりむが故なり。

かくて 人民は、ゼカルヤを待居たりき。而も 彼が堂に於て、暇取れるを、怪み居たり。出づるに及びて、

彼等に言ふ能はざりしかば、彼等 彼が 堂に於て、靈顯を見しことを、明に識れり。かくて、

ただ 頻りに 手眞似を爲し居るのみにて、依然 啞者なりき。程に、彼の勤務の日、満ちければ、

彼 己が 家へと赴けり。而も、

洗者ヨハネに就ける豫告（ルカ）

ヒエリ語の、ルエはヘレン語のオプタダ、シヤにて従來るものなり。

（神の人は吉報を齎す、使者は救拯の者、ミカエルは誰か神の如き者、即ち刑罰の使者。）



ヨハネの福音書  
第二十章  
第二十三節

ガリラヤ(周圍、  
境界)  
ナザレ(見張  
る保護)

洗者ヨハネに就ける報告(ルカ)

一一一

1 24 其後、彼の妻エリサベト 身ごもりしかば、自ら 五

月の間、全く隠れ居りて、言へるは、見そなはせる者

人類に於けるわが耻辱を雪がんと、見そなはせる者

日に於て、ヤーエ即斯の如く、我に爲したり。

三 三 マリヤへの託宣 (ルカ一三)

1 26 さて 第六月に、使者ガブリエル、ガリラヤの「ナザレ」と

名づくる町にべと、神より派遣せられぬ。(即ち) ダビド

の家の「ヨセフ」と名づくる男に言名付せられたる處女の許

(遣されぬ) その處女の名は「マリヤ」なりき。

28 彼女 彼女の許に入りて、言へり。

大慶! 汝 恵まれたる者!

ヤーエ 汝と共に在り!

29 されど 彼女 此言の故に、甚く驚き、こは 如何なる

祝詞ぞと 案じ居たり。使者 彼女に言へり。

恐るること勿れ。汝 マリヤ!

30 汝 神に嘉せられければなり。

31 見よ! 汝 胎に 身ごもらん。

見よ! 汝 子を産まん。

王國(福音)  
ナザレ  
ガリラヤ

三六(ルカ)

一一三



エルヨン（至高）

イエサヤ書九の七、ミカ書四の七、ヤコブの家（イストラエル）王國（統治）

三四節は後世の追加ならん。

マリヤへの託宣（ルカ）

一四

彼「エルヨンの子」と呼ばれん。

神 ヤーエ 彼に その父ダビドの玉座を與へん。

1 永遠にまで、彼ヤコブの家を治めん。

彼の王國は 際限無からん。

34 されど、マリヤ 使者に向ひて、言へり。

如何に、此事の有るべき？

我 未だ 夫を識らざるに！

使者 答えて、彼女に言へり。

聖靈！ 汝は臨まん。

エルヨンの力、汝を覆はん。  
故に、その生るる者は、「聖子」を呼ばれん。

36 見よ！ 汝の親戚エリサベトも、亦其の老年ながら、

子を宿せり。

「石女」と呼ばるる彼女も、今は、その第六月な

37 それ 神よりの言、凡そ空じきこと無からん。

38 マリヤの言へり。

見よ！ ト、ヤーエの婢！

それ 汝の言の如く、我に成れかし。

爰に於て、使者 彼女を去れり。

マリヤへの託宣（マタイ）

一五



四 ヨセフへの託宣

(マタイ二五上)

18 さて、イエス・メシヤの誕生は、次の如くなりき。彼の母マリヤは、ヨセフに言名付せられしが、彼等同居せざる前、聖霊より出でて、彼女の身ごもれる事見出されぬ。特に彼女の夫ヨセフは、義人なり。而も彼女を公然曝すことを欲せず、密に彼女を離縁せんと考へぬ。さて、彼此等の事を思ひ巡らせるに、見よ！ ヤーエの使者、夢に由り、彼に現れて、言へるは、

ダビドの子ヨセフ！ 汝恐るること勿れ。汝の妻マリヤを納めることを。

そは、彼女に宿りしは、聖霊より出でし者なればなり。

21 それ、彼女、子を産まん。汝、彼の名を「イス」と呼ぶべし。そは、此者、彼の民を、彼等の罪より、救ふべければなり。

22 さて、凡て此事の起りしは、ヤーエ預言者を通じて、言ひし事の全うせられんが爲なり。曰く、見よ！ 處女、身ごもらん。而して、子を産まん。彼等、彼の名を「イムマヌエル」と呼ばん。即ち「神我等と共に」の義なり。爰に於て、ヨセフ、睡眠より覺めて、



エの使者の 彼に命じし如く爲し、而して其の妻を  
納めぬ。而も子を産みたまへ、彼彼女を識らざりき。

五 マリヤのエリサベト訪問 (ルカ一五九一-五六)

幾日ならざるに、マリヤ 立上りて、山地に  
ユダヤの町にへと 急ぎ進み、ゼカルヤの家に入り、エ  
リサベトに挨拶せり。程に、エリサベトはマリヤの  
挨拶を聞けるや、胎児を彼女の胎内にて 跳ねぬ。而  
して、エリサベトは 聖霊に満され、かつ 大叫に 聲を  
揚げて、言へり。

祝せられたるかな 汝 女の中に!

祝せられたるかな 汝の胎の果や!

かつ 何處よりして 此事の 我に(臨める)!

それ わが主の母の 我が許に來りしとは!

44 見よ! 汝の挨拶の聲 わが耳に響くや、

胎児 わが胎内にて、歡樂に於て、跳ねければなり。

45 幸福なるかな かの信じし女!

それ ヤーエより 彼女に語られし事 成就せん。

46 (マリヤ) 言へり。

マリヤのエリサベト訪問(ルカ)



「わが魂」も  
「わが霊」も  
「我自身」のこ  
サムエル前書  
二の一、一の

詩篇九一の九

詩篇一〇三の  
一七

マリヤのエリサベト訪問(ルカ)

二〇

わが魂 ヤーエを崇む！

147 わが霊 神をば 樂む！ 主の救

48 それ 彼 彼の婢の卑賤をも顧みぬ。

それ 見よ！ 今より代代 我を賀せん。

40 それ 大能者 大なる事を 我に爲せり。

聖なるかな 彼の名！

50 彼の仁慈は 代代に！

彼を畏れ居る 彼等に！

151 彼の腕に於て、力を致せり。

彼の心の念に驕れる者を 打散せり。

○詩篇八九の一

ヨブ記一、二の  
一、五の  
一、九の  
サムエル前書  
一、七の  
二、七の  
三、〇の  
三、四の  
サムエルの  
二、五の  
イエサヤ書  
一、八の  
詩篇  
一、八の  
三

52 彼 権力ある者を 位より下し、卑賤なる者を 高く  
せり。

53 彼 飢ゑし者を 善物にて 飽かせ、富める者を 空  
手にて 去らしめぬ。

54 彼 彼の僕イスラエルを 引取れり。

彼 仁慈を記憶せんとてなり。

55 彼 正く 我等の祖先に語りしが如し。

アブラハムにも彼の胤にも、永遠に！

56 さて マリヤ 「エリサベト」と共に 三月ばかり、留り

て、己が家にへと歸れり。

マリヤのエリサベト訪問(ルカ)

二二



六 洗者ヨハネの誕生

(ルカ一〇五七—八〇)

1.57 さて エリサベト、産期満ちて、子を産めり。而して彼女の隣人親戚等、ヤーエのその仁慈を、彼女に大ならしめしことを聞きて、彼女と共に喜び居たり。59 さる程に、第八日に、彼等 嬰兒の陽の皮を切らんとて 来り、その父の名に従ひて、此を「ゼカルヤ」と呼ばんとせるに、その母 答へて、言へり。

あらず!

されど 彼「ヨハネ」と呼ばるべし。

61 彼等 彼女に向ひて、言へり。

それ 一人だも 汝の親戚の中に、

ヨハネ(ヤ) 仁慈深し

此名にて 呼ばるる所の者 無し。

62 傍ら 彼等「此を何と呼ばんと欲するか」と、その父

に 戒手真似せしに、 彼 書板を請求し、書いて、言へ

るは、 「ヨハネ」ぞ 彼の名なる!

而して 一同 怪めり。されど 彼の口 忽ち開き、 彼

の舌も 亦(弛み)かつ 神を祝して、言ひ始めたり。

65 かくて 恐怖 彼等の隣人一同の上に臨み、 而して

凡て 此等の事 ユダヤの山地に於て、 遍く言振され、 而

も 聞きし 彼等一同 (之を) 彼等の心に藏めて、言へるは

言さらば 如何なる者に成らんか この嬰兒!

66 是は 彼ヤーエの手 此と共に 在りたればなり。言ふ



詩篇四一の  
三、七二の  
八、一〇六の  
四、一三二の  
の九、一三二の  
の九、一三二の  
角(力即ちメ  
ンヤ)

詩篇一〇六の  
一〇

洗者ヨハネの誕生(ルカ)  
二四  
167 爰に於て、その父ゼカルヤ、聖靈に満され、預言して  
言へるは、

68 ああ、祝すべきかな、イスラエルの神、ヤーエ!  
これ、彼の民に臨みて、贖を爲ししが故なり。  
69 而して、彼、その僕ダビドの家に於て、  
救拯の角を起ししが故なり。  
70 彼、その古の聖なる預言者等の口を通じて、語りしが  
如し。  
71 我等の敵よりの、又同我等を憎む者、同の手よりの救  
拯!

詩篇一〇五の  
八、一〇六の  
四、一三二の  
○ミカ書七の二

マラキ書三の  
一

72 これ、我等の祖先に、仁慈を垂れんとてなり。  
而も、彼の聖約を記憶せんとしてなり。

73 これ、我等の父アブラハムに誓ひし誓約!  
74 これ、敵の手より救はれたる我等をして、  
75 我等の生涯、恐るること無く、  
彼の前に、聖と義とに於て、彼に事へじめんとてなり

76 まことや、汝、嬰兒! 汝も、亦「エルヨンの預言者」  
と、呼ばれん。  
そは、汝、彼の道を備へんとて、主に先立ちて、進む  
べければなり。

洗者ヨハネの誕生(ルカ)



洗者ヨハネの誕生(ルカ)

77 彼等の罪の赦免に於ける救拯の知識を彼の民に與ふべければなり。我

1 我等の神の慈賜を通じて、<sup>78</sup> 旭日は上より、我等に臨まん。

<sup>79</sup> 我れ前闇黒と死蔭とに坐せる彼等を照さんとなり。我れ平和の道に我等の足を導かんとてなり。

<sup>80</sup> かくて我嬰兒父いよいよ成長じ、<sup>81</sup> 精神益ますます發達し、かつ自ら、イスラエルの許に、現るる日まで、荒野に於て在りき。

「慈賜」は慈悲

イエサヤ書九の二

四〇  
四一  
四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇  
五一  
五二  
五三  
五四  
五五  
五六  
五七  
五八  
五九  
六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇  
八一  
八二  
八三  
八四  
八五  
八六  
八七  
八八  
八九  
九〇  
九一  
九二  
九三  
九四  
九五  
九六  
九七  
九八  
九九  
一〇〇

第二章 耶蘇の誕生及び幼時

一 耶蘇の系圖

(マタイ一七)

(ルカ三の二 三下—三八)

1 アブラハムの子なる  
ダビドの子メシヤ  
イスの系圖  
<sup>23B</sup> 居たる如く、ヨセフの子なり  
き。(ヨセフの祖先は)

アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダ

エリ、<sup>24</sup> マタト、  
レキ、マルキ、

耶蘇の系圖(マタイ、ルカ)

二七

この系圖は何れも三節づつ一節五行の中にマタイは十四人、ルカは二十五人、即ち全部にマタイは四十二人、ルカは七十五人の高祖の名を列ね、アブラハム(群衆の父)ダビド(愛されたる者)ヨセフ、ヨセク(加ふ)イサク(嘲弄)ヤコブ(横領)ユダ、ヨダ(讀美)エリ(わが神、昇る)マタト、マタト、マタト、マタト、マタト(神の賜)



レキ(配偶、近侍) マルキ(わが王) タマルは樹の名  
 ベレズ(破壊) セラ(赤) アモス(強壯) ナフム(慰安) ナガイ(輝く) アミナダ(王の臣、わが民は高尚) ナシヨン(占者) シヤルモン(報賞) マアツ(小) シムイ(名高) ラハブ(廣し) ホアズ(迅速) ルツ(女友) ヨハナン(十) エ恵み(深し) セルバベル(バビロニヤに散られたるバビロニヤに)

耶蘇の系圖(マタイ、ルカ)

その兄弟等を生み、  
 1 ユダ、タマルに依りて、ベレズとゼラとを生み、ベレズ、エスロムを生み、  
 2 エスロム、アラムを生み、  
 3 アラム、アミナダブを生み、  
 4 アミナダブ、ナシヨンを生み、  
 5 ナシヨン、シヤルモンを生み、  
 6 シヤルモン、ラハブに依りて、ボアズを生み、  
 7 ボアズ、ルツに依りて、オベドを生み、  
 8 オベド、イシイを生み、  
 9 イシイ、ダビド王を生み、  
 10 ダビド、ウリヤ

ヤナ、  
 ヨセフ、  
 ヤ、アモス、ナ  
 フム、エスリ、  
 ナガイ、  
 マタチヤ、シム  
 イ、ヨセク、  
 ヨダ、  
 レサ、ゼルバベ  
 ル、シアルチエル、  
 ネリ、  
 アチ、  
 コサム、

生れたる) シエアルチエル(神に我が求めたる) ネリ(ラム) イシイ(ヤ) コサム(占ふ、分つ) エル(見張る) ウリヤ(わが光は) ソロモン(平和) エリエゼル(わが神は助け) レハベアム(民を眠す) アビヤ(わが父は) アサフ(集収人) シメオン(聞く、狼の子) エリヤキム(神の起す者) イエホシヤバト(ヤエサバ)

の[妻]に依りて、

7 ソロモン、レハベアムを生み、  
 8 レハベアム、アビヤを生み、  
 9 アビヤ、アサフを生み、  
 10 アサフ、イホシバトを生み、  
 11 イホシバト、ヨラムを生み、  
 12 ヨラム、ヨラム、ウジヤを生み、  
 13 ウジヤ、ヨタムを生み、  
 14 ヨタム、アハズを生み、  
 15 アハズ、ヒズキヤを生み、  
 16 ヒズキヤ、メナシヤを生み、  
 17 メナシヤ、メナ

エルマダム。

エル、  
 エゼル、ヨリム、  
 マタト、  
 レキ、  
 ユダ、ヨセフ、ヨ  
 ナム、  
 エリヤキム、  
 ア、メナ、  
 ナタン、  
 ダビド、  
 イシイ、



カナン(槍を  
 作る者、所有  
 アルバクシヤ  
 ド(カルヤヤ  
 境界) 14  
 アビウド(ユ  
 ダ人の父)  
 シエム(名)  
 アア(休安)  
 サドク(義)  
 エレド(子孫)  
 エレド(子孫)  
 (神の讚美者)  
 エリウド(神  
 の榮光)  
 エルアザル  
 (神の助ける  
 者)  
 エノシユ(人)  
 シエツ(代理)  
 アザム(人)  
 マリヤ(頑固  
 反抗)  
 シリヤ語の古  
 寫本には「ヨ  
 セフイエス  
 を生めり」こ  
 有り

カナン(槍を  
 作る者、所有  
 アルバクシヤ  
 ド(カルヤヤ  
 境界) 14  
 アビウド(ユ  
 ダ人の父)  
 シエム(名)  
 アア(休安)  
 サドク(義)  
 エレド(子孫)  
 エレド(子孫)  
 (神の讚美者)  
 エリウド(神  
 の榮光)  
 エルアザル  
 (神の助ける  
 者)  
 エノシユ(人)  
 シエツ(代理)  
 アザム(人)  
 マリヤ(頑固  
 反抗)  
 シリヤ語の古  
 寫本には「ヨ  
 セフイエス  
 を生めり」こ  
 有り

耶蘇の系圖(マタイ、ルカ)

11 シヤを生子、アモス、ヨ  
 シヤを生子、アモス、ヨ  
 11 ヨシヤ、バビロニア捕囚の時、  
 イエホヤキンとその兄弟等を生  
 めり。  
 12 バビロニア捕囚の後、イエホヤキ  
 シアルチエルを生み、シエ  
 ルチエル、ゼルバベルを生み、  
 13 ゼルバベル、アビウドを生み、  
 アビウド、エリヤキムを生み、  
 エリヤキム、アヅルを生み、

オセル、ボアズ、  
 シアルモン、  
 ナシ、33 アミナダ  
 プ、アルニ、ヘス  
 ロン、ベレズ。  
 ユダ、34 ヤコブ、イ  
 サク、アブラハム、  
 テラ、  
 ナホル、35 セルグ、  
 レグ、ペレグ、エ  
 ベル、

14 アヅル、サドクを生み、サドク  
 アキムを生み、アキム、エリス  
 ドを生み、  
 15 エリウド、エルアザルを生み、  
 エルアザル、マタンを生み、マ  
 タン、ヤコブを生み、  
 16 ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生  
 み、この女より「メシヤ」と云は  
 るイス、生れぬ。

シラ、36 ケナン、ア  
 ルバクシド、  
 レメク、37 メツシラ、  
 エノク、エレド、  
 (マ)ラルエル、  
 ケナン、38 エノシ、  
 主シツ、アザム、神、

17 凡ての歴代は、  
 18 十四代、  
 19 十四代、  
 20 十四代、



アウグストは紀元前三十年より紀元十四年八月十九日までローマの帝位に在り、タイリニナは紀元前四年より紀元六年まで回数スリヤの總督たり。【登録】とは月籍調査

耶蘇の系圖(マタイ、ルカ)

ビドよりバビロニヤ捕囚まで十四代、バビロニヤ捕囚よりメシヤまで十四代なりき。

二 耶蘇の誕生

マ 21 なる程に、其頃、満天の下に、登録すべしとの詔勅カエサルアウグストより出でぬ。此はタイリニナ一登録なりき。爰に於て、一同登録せんとて、各自己が町に入と進み居たり。

(マタイ二) (の二五下)

(ルカ二) (の一七)

タ

4 ヨゼブも亦主ガララよりナザレの町より、ユダヤに上ベスレム」と呼ばるる所のダビドの町にへと上れり。これ彼はダビドの血統にて家族なれば、己が言名付の身をもれるマリヤと共に登録せんとてなり。

イ

1 25B 「ヨセフ」彼の産期満ちて、彼女その初子を産み、而して彼を襁褓に包み、かつ彼を藪槽に臥スと呼べり。これ旅館に於て、彼等に、場處無かりしが故なり。

耶蘇の誕生(マタイ、ルカ)



三 ベスレヘム郊外の牧者 (ルカ二〇)

28 偶然 同じ地方に、その群の夜番を爲して、野宿せる  
牧者等ありき。而して ヤーエの使者 彼等の傍に立ち、  
かつ ヤーエの榮光 彼等を巡り照しければ、彼等大  
なる恐怖に怖えぬ。使者 彼等に言へり。

汝等 恐るる勿れ。そは 見よ！ 全人民に及ぶ  
大なる喜悅の福音を 我 汝等に齎せばなり。

11 それ 今日、汝等に、ダビドの町に於て、  
主 メシヤなる救主 生れぬ。

12 而して 汝等には、これ その證徴なり。  
汝等 襁褓に包まれ、蓐槽に臥する赤兒を見出さん。

13 忽然にして、夥しき天軍 使者と共に現れ、神を讚美  
して、言へるは、

14 至高處には、神に 榮光！  
地の上には、人に 平和！

15 至る程に、使者等 彼等の處より、天にへと去れるや  
牧者等 相互に言ひ始めたり。

いざ 我等をして、ベスレヘムまで 往かしめよ。



我等をして、ヤエの我等に識らしし所のこの成  
 りたる事を見しめよ。  
 26 彼等急ぎ往きて、マリヤ・ヨセフ及び、  
 赤兒を捜し出せり。17 さて、彼等見、この  
 嬰兒に就いて、  
 彼等に語られし事を識らしめければ、18 聞きし  
 彼等一同、牧者等の己等に向ひて、語りし事に就いて怪  
 り。19 されど、マリヤは、彼女の心に於て、思ひ巡ら  
 つ、凡て此等の事を深く秘め置きぬ。20 而して、  
 牧者等その聞きし所見し所、  
 凡て彼等に向ひて語られし如  
 くなりしを以て、神に榮光を歸し、かつ讚美して、  
 歸れり。

四 嬰兒の切禮 (ルカ二の二四)

かくて、その陽の皮の切らるべき八日の日、  
 満ちり。而も、その名を「イス」と呼ばれぬ。これ、  
 その胎に宿りし前に、使者に依りて、呼ばれしものなり。  
 かくて、彼等の清淨の日、満ちし時、  
 モーセの律法に従ひ、  
 ヤエに獻げんとて、  
 彼を、  
 イエルサレムにへど、  
 連上れり。23 此れ、  
 ヤエの律法に於て、  
 正に記されたるが如し。

凡そ始めて胎を開ける男兒は、  
 「ヤエに聖なる者」と呼ばれん。  
 24 此れ、  
 ヤエの律法に於て、  
 「斑鳩二雙、  
 或は、  
 雛鴿二

嬰兒の切禮(ルカ)

イスラエル民の間に生れ  
 切禮を施せらるる  
 八日目に  
 見たり  
 或るアラ  
 ビヤ人の間  
 には、  
 エルの如く、  
 十三歳の時  
 に行ふ習慣も  
 有る。こゝに  
 利未記二二の  
 二、三  
 (イエルサレム  
 平和の住處)

出埃及記二三  
 の二・一・二・  
 一五

利未記二の  
 八・五の二・一



トール、ベン  
ヨリナリはヒ  
アリ語ナリ。

慰安(メシヤ、  
救拯)

嬰兒の切禮(ルカ)  
羽と有る言に従ひて、犠牲を獻げんとてなり。 三八

五 シメオンとハナ (ルカ二の  
二五―三八)

かくて 見よ！「シメオン」名づくる人 イルサレム  
に於て 在りき。此人は イスラエルの慰安を期待せる  
義人、かつ 敬虔なる者にて、聖靈 彼に臨み居たり。  
而も ヤーエのメシヤを 自ら見ざる前に、彼 死を  
見じと、聖靈に依りて、示現せられたり。かくて 彼  
(聖靈に於て、宮に入りしに、恰も 彼等兩親 律法の慣  
例に従ひ、彼に就いて爲さんと、嬰兒イヌを携へ入りし  
かば、彼 自ら 此を抱き、神を祝し、而して 言へり

救拯(メシヤ)

備へし物(救  
拯の事)

ああ 今こそ 汝 汝の言に従ひて、安然に、  
汝の奴隷を去らしむるなれ。ああ 主君！  
これ わが目 汝の救拯を見たるが故なり。  
これ 萬民の前に 汝の 備へし物！  
異邦人等の示現の爲の光明！  
而も 汝の民イスラエルの榮光！

傍ら「イヌ」の父と母とは、彼に就いて 語られたる言  
をば怪めるに、シメオン 彼等をも祝し、彼の母マリヤ  
に向ひて、言へり。



不信者の  
迷、  
信者の救

十字架を見る  
時の母の苦痛  
信者不信者の  
態度

アシエル（辛  
鳥）  
ベヌエル（神  
の面）  
ハナ（愛嬌）

シメオンとハナ（ルカ）

四〇

見よ！ 此子の 立てられたる！ イスラエルの

多数の 轉覆と隆興と反駁せらるる 證徴とにこそ！

255 まことや 大なる 劍 汝のその魂を貫かん。

それ 思念は 多数の 心の中より 現れん。

愛は アシエル族のベヌエルの娘なる女預言者ハナあり

き。 此女既に 甚く年 老いけるが、會て 處女の時より七年間、その

女は 宮を離るること無く、 日夜 斷食祈禱して 事へ

居りしが、 同時刻に、 彼女も 近寄りて、 神に感謝し、

而して 彼に就いて、 イエルサレムの贖を期待せる 彼等一

同に、 語が始めた。

六 東方の博士（マタイ）

215 きて へロデ王の代に、 ユダヤのベスレヘムに於て、

イス 生れけるが、 見よ！ 博士等、 東方よりイエルサレ

ムに 來りて、 言へるは、

何處に居るか、 ユダヤ人等の王として生れし 彼！

そは 我等 東方に於て、 彼の星を見ぬればなり。

而して 我等 彼を拜せんとて、 來りければなり。

216 されど 之を聞きて、 へロデ王 及び 彼と共に 全

イエルサレムも 狼狽せり。 而して 彼 祭司長 及び

民の文學士等 一同を集めて、 何處に メシヤの 生るべ

きかを 彼等に問ひければ、 彼等 彼に言へり。

東方の博士（マタイ）

四一



ユダヤのベスレヘムに於て。正に斯く記されたればなり。  
 而も汝！汝！ユダヤの地ベスレヘム！  
 ユダの主なる町に於て、汝王決して最小の者に非ず。  
 汝の中より總督出で來るべければなり。  
 彼わが民イスラエルを牧する程の者なればなり。  
 其時、ヘロデ密に博士等呼びて、彼等より、星  
 の現るる時を偲め、彼等をベスレヘムにへと遣して  
 言へり。  
 汝等進みて、嬰兒に就き、具に搜し出せ。  
 されど汝等見出せる時、我に報告せよ。  
 それ我も亦自ら往きて、彼を拜せん。

さて彼等王に聞きて、進みしに、見よ！東方に  
 於て、彼等の見たる星、彼等を導き、嬰兒の居りし  
 處まで往きて、その上に止れり。さて彼等星を見て  
 喜びしその喜悅は、甚だ大なりき。かくて彼等家に  
 入りて、その母マリヤと共に居る嬰兒を見、平伏して、  
 彼を拜し、彼等の寶盒を開きて、黄金、乳香、没薬の禮物を  
 彼に獻げぬ。而して彼等ヘロデの許に歸らざるやう、  
 夢に由りて告示せられ、他の道を通りて、彼等その  
 國にへと歸れり。

七 埃及エジプト避難

(マタイ二の  
一三—一八)



213 さて [博士]等 歸りけるや、見よ！ ヤーエの使者  
 夢に由りて、現れ、エヨセアに言へるは、  
 起きて、汝 嬰兒と、その母とを伴へ。  
 而して、汝 エジプトにへと逃げよ。  
 而して、我が示汝に告ぐるまで、彼處に居れ。  
 是をば、ヘロデ、此を亡さんとて、嬰兒を求むべければ  
 驚なり。』  
 [ヨセフ] 起きて、夜 嬰兒と、その母とを伴ひ、而して  
 エジプトにへと退き、ヘロデの末期まで、彼處に在りき。  
 これ、預言者を通じ、ヤーエに依りて、言はれし事の  
 全うせられんが爲なり。』曰く、  
 エジプトより、我わが子を呼出せり。』

16 其時、ヘロデ、博士等に依りて、欺かれしことを見て  
 大に憤り、(人)を遣し、博士等より、慥めし時に従ひて、  
 スレヘム、及び、その全附近に於ける、二歳より、その以下  
 の男兒一同を殺せり。爰に至りて、預言者イルメヤを通  
 じて、言はれし事、全うせられぬ。』曰く、  
 18 聲、ラマに於て、聞かれぬ。  
 悲泣、及び、大なる哀哭！  
 言をの兒等を思ひて、泣けるラケル！  
 而も、彼女、慰めらるることを欲せず。  
 此れ、彼等の、在らざるが故なり。』



(マタイ二の  
九—二三)

(ルカ二  
の三九)

219 さて、ヘロデ 死にけるや、見よ！ ヤーエの使  
者、夢に由りて、エジプトに於けるヨセフに現れて  
言へるは、

220 起きて、汝 嬰兒とその母とを伴へ。

而して 汝 イスラエルの地にへと進め。

そは 嬰兒の魂を求め居たる彼等 死にたればな

り。

21 さて「ヨセフ」起きて、 嬰兒とその母とを伴ひ、

イスラエルの地に入りしが、アルケラオ 彼の父へ  
ロデに代りて、ユダヤの王たりと聞き、 彼處に到る

アルケラオ  
(民を治むる)

魂(生命)

ことを恐れぬ。

されど(ヨセフ) 夢に由りて、告示

せられて、ガリラの地方にへと退き

「ナザレ」と云はるる町に入りて、住

めり。これ 預言者等を通じて、言

はれし事の 全うせられんが爲なり

彼「ナザレ人」と呼ばれん。

220 かくて 彼等

ヤーエの律法に従

ひて、萬事を果し

ければ、ガリラに

へと己が町ナザ

レにへと歸れり。

九 ナザレ 住居 (ルカ二の  
四〇—五二)

240 さて 嬰兒 次第に成長し、益 強健に成り、智慧に

満され、而して 神の恩寵 その上に在りき。

ナザレ住居(ルカ)



ハサクはヒア  
リ勝なり。出  
埃及を記念す  
る祭日なり。

ヒエロはヘレ  
ン語なり。神  
殿全體を云  
ふ。

ナザレ住居(ルカ)

四八

24 かくて彼の兩親は過越の祭日に、  
ムにへと赴く習慣なりしが、  
彼十二歳に成りし時、  
彼等祭日の例に従ひて、  
イエルサレムに上り居り、  
終りて、  
彼等歸れるに、  
童イエルサレムに於て、  
遺りしが、  
彼の兩親は、  
之を識らざりき。  
されど、  
彼等彼をば、  
同伴者の中に居ること思ひて、  
一日の旅路を  
往き、  
漸く親戚知己の中に、  
彼を捜し始めしかど、  
見  
出さず、  
彼を捜しつづ、  
イエルサレムにへと歸れり。  
程に、  
彼等三日の後、  
宮に於て、  
先生等の中央に坐し、  
彼等より聞き、  
かつ、  
彼等に質問し居る彼を見出せり。  
47 さて、  
彼より聞ける彼等一同、  
彼の聰明と、  
應答との故  
に、  
魂消居たり。  
48 (兩親も) 亦彼を見て、  
膽を潰し

けるが、彼の母彼に向ひて、言へり。

見よ！ 何故に汝我等に斯の如く爲ししや。

見よ！ 汝の父も我も、悶えつつ汝を捜し居るなり。

49 (イス) 彼等に向ひて、言へり。

何故に、それ汝等我を求め居たるか。

我わが父の家)に居らざる可らざる事を汝等知ら

ざりしか。

而も彼の彼等に語りし所の事を彼等自ら悟ら

ざりき。かくて(イス) 彼等と共に下り、ナザレに入り

て、  
彼等に従ひ居たり。  
而して彼の母は言はれし凡

ての事を、  
彼女の心に於て、  
秘め居たり。

かくて、  
イスの智慧、  
體格、  
神と人間との寵愛、  
彌増し居

ナザレ住居(ルカ)

四九

サムエル前書  
二の二六



ナペリオ帝は  
紀元十四年八月  
三十日ヨリ  
三月十六日まで  
マに君臨せ  
り。マに君臨せ  
り。(馬好)  
カヤパン(恩寵)  
ハヤン(愛寵)

第三章

宣教の準備

(マルコ一の四・二三・六・五・七・八)

(マタイ三の一一・一二)

(ルカ三の二一・二八)

イメシヤ  
イメシヤの  
音の開始

イタマ

三年、カエサル  
五年、その兄弟  
バの祭司长たりし時

チペリオは在位の十  
ネアの總督、ヘロテは  
イッリヤ、ツラ  
アナン及びカヤ

洗者ヨハネの傳道(マルコ、マタイ、ルカ)

神の言、荒野に於け

五一

ナザレ佳居(ルカ)

五〇





ヨルダンの下  
ヨルダンの水  
ヨルダンの流  
ヨルダンの淵

イエサヤ(ヤ  
エの援助)

イマキ書三の  
一には

ネ 罪の赦免にきて、改心の洗禮を説教しつ

洗者ヨハネの傳道(マルコ、マタイ、ルカ)

ヨハネ ユダヤの荒野に於て、現れ、説教して、言へるは、汝等心を改めよ

五二

るゼカルヤの子ヨハネに臨めり、而して彼罪の赦免にきて改心の洗禮を説教しつ、遍くヨルダン附近に赴けり。

預言者イ  
サヤに於て記されたるが如し。

預言者イサヤを  
通じて、言はれし彼は此人なればなり。曰く、

預言者イサヤの言の書に於て記されたるが如し。

我  
わ

「見よ！使者を派  
遣す。汝の前に  
道を掃除せよ」  
イエサヤ書四

イエサヤ書四  
の四

コルマ

イタマ

が使者を派遣す。彼 汝の道を備へん。 汝の面に 荒野に於て、呼はる者の聲！  
汝等 ヤーエの道を整へよ。  
汝等 彼の通路を直くせよ。

洗者ヨハネの傳道(マルコ、マタイ、ルカ)

凡ての谷は 凡ての山は 凡ての谷は 填められん。 凡ての山は 坦らされん。

又

五三

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....



コ ル マ

イ タ マ

洗者ヨハネの傳道(マルコ、マタイ、ルカ)

曲れる處は直きものと成らん。  
峻しき處は平なる道と成らん。

(ヤーエの榮光は示されん)。  
有ゆる肉は神の救拯を見ん。

16 かくて、ヨハネは  
駱駝の毛織を着、彼の  
腰に、革帯を締め、蝗と  
野蜜とを食ひ居たり。  
かくて、ユダヤ全  
イルサレム入一同、彼  
84 さて、ヨハネは自ら、  
駱駝の毛衣を用ひ、彼の腰  
に、革帯を締め、かつ彼の  
食物は、蝗と野蜜となりき。  
其時、イルサレム全ユダ  
ヤ・ヨルダンの全附近、彼の

の許に進み出でて、彼  
等の罪を告白し、而して  
ヨルダン河に於て、  
彼に依りて、洗せられ  
居たり。  
許に進み出でて、彼等の罪  
を告白し、而して、ヨルダ  
ン河に於て、彼に依りて、  
洗せられ居たり。  
カ

コ ル マ

彼等の洗禮の  
爲に來れるパリサイ人とサ  
ドカイ人との多數の者を見  
て、彼等に言へり。

汝等、蝗の子孫！  
將に來らんとする震怒

洗者ヨハネの傳道(マルコ、マタイ、ルカ)

故に、彼己に依り  
て、洗せられんとて、  
進み出でたる群衆に言  
ひ居たり。

汝等、蝗の子孫！  
將に來らんとする震怒



より逃ぐることを、  
誰が 汝等に論したる

然らば 汝等 改心に  
適する果を結べ。

我等の父は アブラハム  
言はんと考ふる勿れ  
汝等に言ふ

より逃ぐることを、  
誰が 汝等に論したる

然らば 汝等 改心に  
適する果を結べ。

我等の父は アブラハム  
言ひ始むる勿れ  
我對汝等に言ふ

べければなり。此等の石  
の中より、アブラハム  
に、兒等を興し能ふな  
り。  
さて 斧は既に樹  
の根に向けて置かる！  
故に凡そ良き果を  
結び居らざる樹は、  
伐られて、火に投入  
せらる！

べければなり。此等の石  
の中より、アブラハム  
に、兒等を興し能ふな  
り。  
さて 斧も既に樹  
の根に向けて置かる！  
故に凡そ良き果を  
結び居らざる樹は、  
伐られて、火に投入  
せらる！







カネ) 説教し  
て、言

イ タ マ

らんご、彼等の心に於て、推計り居れるに  
ヨハネ人答へて、一彼等一同に言へるは

六〇

へるは 我よりも權能  
ある彼 我が  
後に來る！  
我は 屈みて  
彼の履物の紐  
を釋くにも足  
らぬ者なり。  
1. 我 自ら 汝

汝等を改心にへ  
と、水に於て洗す。  
されど 我が後に  
來る彼は 我より  
も 權能ある者な  
り。  
我は 彼の履物を

げに 我 自  
ら 水にて、  
汝等を洗す。  
されど 我よ  
りも 權能あ  
る彼 來る！  
我は 彼の履

等を 水にて  
洗せり。

彼 自ら 汝  
等を 聖靈に  
て、洗せん。

執るにも足らぬ者  
なり。

彼 自ら 汝等を  
聖靈と火とに於て  
洗せん。

物の紐を釋く  
にも足らぬ者  
なり。

彼 自ら 汝  
等を 聖靈と  
火とに於て、洗

.....  
.....  
.....

彼の箕は彼の  
手に在り！  
彼 その禾場を  
能く淨めん。

彼の箕は彼の  
手に在り！  
これ彼の禾場  
を能く淨めん  
をてなり。



洗者ヨハネの傳道(マルコ、マタイ、ルカ)

.....  
.....  
.....  
.....  
.....

彼<sup>かれ</sup> その穀<sup>こ</sup>を  
納<sup>な</sup>屋<sup>や</sup>に納<sup>な</sup>めん。  
されど糠<sup>か</sup>をば  
彼<sup>かれ</sup> 熄<sup>き</sup>えざる火<sup>ひ</sup>  
にて、燒<sup>や</sup>盡<sup>つく</sup>さん。

六二  
彼<sup>かれ</sup> その穀<sup>こ</sup>を  
彼<sup>かれ</sup> の納<sup>な</sup>屋<sup>や</sup>に納<sup>な</sup>め  
んとてなり。  
されど糠<sup>か</sup>をば  
彼<sup>かれ</sup> 熄<sup>き</sup>えざる火<sup>ひ</sup>  
にて、燒<sup>や</sup>盡<sup>つく</sup>さん。

318 まことや (ヨハネ)  
人民<sup>じんみん</sup>を勵<sup>はげ</sup>まして、

福音<sup>ふくいん</sup>を宣<sup>のたま</sup>へ居<sup>ゐ</sup>たり。

二 耶蘇の洗禮

(マルコ二)

(マタイ三の二七)

(ルカ三の二)

19 さる程<sup>ほど</sup>に、其頃<sup>そのころ</sup>、  
イス<sup>いす</sup> ガリラのナザ  
レより來<sup>きた</sup>り、ヨルダ  
ンに入<sup>い</sup>り、ヨハネに  
依<sup>よ</sup>りて、洗<sup>せん</sup>せられぬ。

818 其時<sup>そのとき</sup>、  
ハネに依<sup>よ</sup>りて、洗<sup>せん</sup>せ  
られんとて、ガリ  
ラより、彼の許<sup>もと</sup>に  
ヨルダンに臨<sup>のぞ</sup>む

321 さる程<sup>ほど</sup>に、  
人民<sup>じんみん</sup>諸<sup>もろ</sup>共に、洗<sup>せん</sup>  
せらるるや、  
イス<sup>いす</sup>も亦<sup>また</sup>  
洗<sup>せん</sup>せられて、

コルマ

314 されど「ヨハネ」固<sup>かた</sup>く辭<sup>ひ</sup>せんとして、言<sup>い</sup>へるは  
我<sup>われ</sup>こそ自<sup>みづか</sup>ら、汝<sup>なんぢ</sup>に依<sup>よ</sup>りて、洗<sup>せん</sup>せらるべきに！  
汝<sup>なんぢ</sup>自<sup>みづか</sup>ら、反<sup>かへ</sup>つて、我<sup>われ</sup>が許<sup>もと</sup>に來<sup>きた</sup>れるか。  
15 されど、  
答<sup>こた</sup>へて、彼<sup>かれ</sup>に言<sup>い</sup>へり。

耶蘇の洗禮(マルコ、マタイ、ルカ)

六三

カ



「義」は儀式習  
俗を破らぬ

マ ル コ

耶蘇の洗濯(マルコ、マタイ、ルカ)  
汝(なんぢ) 唯(ただ) 今(いま) (之(これ)を) 任(まか)し 置(お)け。 汝(なんぢ) 言(い)へ。 我(われ) 等(ら)の 分(ぶん)なれば 乃(すなは)ち 有(あ)る 義(ぎ)を 全(ま)うす べき こと 我(われ) 爰(こゝ)に 於(お)て、 彼(かれ) [イス]に 任(まか)す。 洗(せん)せられて、

10 [イス] 直(ただ)に 直(ただ)に 水(みづ)より 上(あ)がる 天(てん)を開(ひら)け、 天(てん)を開(ひら)け、 水(みづ)の中(なか)より 上(あ)がる 見(み)よ! 天(てん)を開(ひら)け、 天(てん)を開(ひら)け、 彼(かれ)に へと 下(くだ)れる 上(うへ)に 下(くだ)れる 神(かみ)の 靈(たま)を見(み) 靈(たま)を見(み) 而(しか)し 而(しか)して 見(み)よ! 曰(いは)す 天(てん)より 出(い)で 天(てん)より 出(い)で 而(しか)して 曰(いは)す 祈(いのち)を 居(お)けるに、 天(てん)を開(ひら)け、 聖(せい)靈(たま)は 鴿(はま)の 如(ごと)し、 物(ぶつ)體(たい)の 姿(すがた)に 於(お)いて、 [イス]の 上(うへ)に 下(くだ)る 而(しか)して 洗(せん)せられて、

六四

カ ル

て 天(てん)より 出(い)で 声(こゑ)ありき。

汝(なんぢ)は わが 愛(あい)子(こ)なり。  
我(われ) 汝(なんぢ)に 於(お)いて、 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し

此(こ)は わが 愛(あい)子(こ)なり。  
我(われ) 彼(かれ)に 於(お)いて 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し

天(てん)より 出(い)で 声(こゑ)ありき。  
汝(なんぢ)は わが 愛(あい)子(こ)なり。  
我(われ) 汝(なんぢ)に 於(お)いて、 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し 樂(たの)し

3<sup>23A</sup> かくて 出(い)で [イス] 自(みづか)ら (宣(せん)教(きょう)を) 始(は)めし 時(とき)、 齡(よはひ) 三(さん)十(じゅう) 歳(さい) 程(ほど) なりき。

三 耶蘇の誘惑

耶蘇の誘惑

六五



悪魔(妨害者)  
 「投出す」急劇  
 に突出すこと  
 サタン(反對  
 者)

耶蘇の誘惑(マルコ、マタイ、ルカ)  
 (マルコ一三)

1<sup>12</sup>かくて 靈 直  
 に「イエス」を、荒野  
 にへと投出し、而  
 して 彼 サタン  
 に依りて試みられ  
 四十日、荒野に於  
 て在りき。而も  
 野獸と共に在りき。

(マタイ一四)

4<sup>1</sup>其時、イエス  
 悪魔に依りて試  
 みるるやう、  
 靈に依りて、荒  
 野にへと導き上  
 げられ、四十日  
 四十夜、斷食し  
 たる後、飢ゑぬ。

六六  
 (ルカ 四の一四・九  
 一一二・五八・一三)

4<sup>1</sup>さて イエス 聖  
 靈に満ちて、ヨル  
 ダンより歸り、  
 靈に於て導かれ、荒  
 野に於て、四十日  
 悪魔に依りて試み  
 られ、其等の日に  
 何を食せず、日  
 數終へて、飢ゑ  
 ぬ。

「レヘム」の  
 ン語の「アル  
 トス」は實は  
 今日「ビスキ  
 ツ」の如きも  
 のにて普通は  
 厚さ五分程の  
 圓形或は楕圓  
 形の皿の如き  
 大きなり。  
 申命記八の三

マ ル コ

4<sup>3</sup>かくて 試むる者 近  
 寄りて、「イエス」に言へり。  
 汝 もし 神の子なら  
 ば、汝 言へ。  
 此等の石のパンと成  
 るやう。  
 4<sup>4</sup>されど イエス 答へて  
 言へり  
 それ 記されたり。  
 「人は パンのみに基き  
 て、活く可らず。  
 されど 神の口を通じ

耶蘇の誘惑(マルコ、マタイ、ルカ)

4<sup>3</sup>さて悪魔「イエス」に言へ  
 り。  
 汝 もし 神の子なら  
 ば、汝 言へ。  
 此石に パンと成るや  
 う。  
 イエス 彼に向ひて、答  
 へぬ。  
 それ 記されたり。  
 「人は パンのみに基き  
 て、活く可らず。」



「悪魔」と譯せるはヘレン語の「ヂヤボラス」にて「迷る」の義なり。即ちヒブリア語の「サタン」と同意義なり。

詩篇九一の一  
一・二二

マ

耶穌の誘惑(マルコ、マタイ、ルカ)

て進み出づる有ゆる言

に基きて

4 夫より 悪魔 「イス」を

聖き町にへと伴ひ、彼を

宮の高樓の上に据ゑ、而

して 彼に言ふ。

汝 もし 神の子なら

ば、

汝 已を、下に投げよ。

そは、その 記された

ればなり。

………

4 きて (悪魔) 「イス」を

イルサレムにへと導きて

宮の高樓の上に据ゑ、而

して 彼に言へり。

汝 もし 神の子なら

ば、

汝 已を、此處より

下に投げよ。

10 所は、その 記された

ればなり。

申命記六の一  
六

コ

耶穌の誘惑(マルコ、マタイ、ルカ)

再度、それ 記された

り。

………

「汝に就いて、

彼、その使者等に命せ

ん。

而して 彼等、手の上

に 汝を捧げん。

汝、荷にも 汝の足を

石に衝當てざれ」。

7 イス 彼に言へり。

再度、それ 記された

り。

汝を、安全に護るやう

汝に就いて、

彼、その使者等に命せ

ん。

11 而して 彼等、手の上

に 汝を捧げん。

汝、荷にも 汝の足を

石に衝當てざれ」。

12 イス 答へて、彼に言

へり。

それ、言はれたり。



耶蘇の誘惑(マルコ、マタイ、ルカ)

「汝 決して 汝の神ヤ

ーエを試むる勿れ」

4 悪魔 再度、「イス」を

いと高き山にへと伴ひ、

彼に 世界の諸王国と其

等の榮光とを示し、而し

て 彼に言へり。

.....  
.....  
.....  
.....  
.....

七〇

「汝 決して 汝の神ヤ

ーエを試むる勿れ」

4 かくて 「イス」を連上り

て、 瞬間に、 人間世界

の諸王国を 彼に示し、

而して 悪魔 彼に言

へり。

汝に！ 我 この一切  
の權威とその榮光とを  
汝に與へん。  
我に！ これ 我に渡  
されたるが故なり。

汝 退け、サタン！

そは その 記された

ればなり。

「汝の神ヤーエを 汝

耶蘇の誘惑(マルコ、マタイ、ルカ)

.....  
.....  
.....  
.....

汝 もし 伏して、我

を拜せば、

我 汝に 凡て此等の

物を與へん、

10 其時、 イス 彼に言ふ

.....  
.....  
.....  
.....

而して 我 我が欲す

る者に、之を與ふ。

7 汝！ 故に 汝 もし

我が前に拜せば、

凡ての物は、それ 汝

の有たらん。

8 かくて イス 答へて

彼に言へり。

.....  
.....  
.....  
.....

それ 記されたればな

り。

「汝の神ヤーエを 汝



コルマ

拜すべし。  
ただ神にのみ  
汝事ふべし。

拜すべし。  
ただ彼にのみ  
汝事ふべし。

1<sup>13B</sup> 而して  
使者等も  
「イス」に給仕  
し居たり。

4<sup>11</sup> 夫より 悪魔  
「ス」を遣す。而して  
見よ！ 使者等  
寄りて、彼に給仕し  
始めたり。

「イ」  
4<sup>13</sup> かくて 有ゆる誘  
惑を盡せるや、悪魔  
時期の到るまで、「イ」  
「ス」を離れぬ。

四 洗者ヨハネの證明 (ヨハネ一四)

エリヤ(ヤ)の力、或は  
ヤエはわが  
神)

1<sup>19</sup> かくて 「汝！ 汝は 誰ぞや」と 「ヨハネ」に問はんとて  
ユダヤ人等 イルサレムの中より、祭司・レキ人等を、彼  
の許に派遣せし時のヨハネの證明は、此なり。即ち彼  
告白して、否ます、「我は メシヤに非ず」と告白せり。而  
して 彼等 彼に問へり。  
然らば 如何に？ 汝は エリヤなるか。  
彼 言へり。  
我に非ず。

汝は 預言者なるか。  
彼 答へぬ。  
あらず。

洗者ヨハネの證明(ヨハネ)



洗者ヨハネの證明(ヨハネ)

1 故に 彼等 「ヨハネ」に言へり。

汝は 誰なるか。……………

それ 我等をして、我等を派遣せし彼等に 答を與へしめよ。

汝 己に就いて、何と言ふや。

23 彼 言へり。

それ 正に 預言者イサヤの言へるが如し。

「我！ 我は 荒野に於て呼はる者の聲！」

「汝等 ヤーエの道を直くせよ。」

而して 派遣せられたる彼等は パリサイ人中の者なりき。

25 彼等 又 彼に問ふて、彼に言へり。

然らば 何故に 汝 洗し居るか。

汝！ 汝は メシヤにも非ざるに！

尙又 エリヤにも、預言者にも非ざるに！

26 ヨハネ 彼等に答へて、言へるは、

我！ 我は 水に於て洗す。 汝等の中央に、汝等の 知らざる彼 立つ。

27 我が後に來る彼！

我は 彼の履物の紐を釋くにも足らぬ者なり。

28 此等の事は ヨハネが 洗し居たるヨルダンの彼方、

ベスアニヤに於て、起れり。

29 翌日、「ヨハネ」己が許に來れるイヌを眺めて、言ふ。

見よ！ 世の罪を除く神の小羊！

30 此ぞ 我が就いて言ひし彼なる！

洗者ヨハネの證明(ヨハネ)



洗者ヨハネの證明(ヨハネ)

我が後に男來る!

彼我が前に成りき。羊の小羊!

これ我が前に在りし故なり。

1 我! 而も我彼を知らざりき。

されどイスラエルに彼の現れんとてなり。

ゆゑに我! 水に於て洗しつつ、我來れり。

32 ヨハネ又證明して、言へるは、

天より出でて、鶴の如くに下り、

彼の上に留りし靈を我視たり。

33 我! 而も我彼を知らざりき。

されど水に於て洗せしめんとて、我を遣しし彼

その彼! その彼我に言へり。

「汝誰の上にも、靈下りて、

彼の上に留るを見ん。

此ぞ聖靈に於て洗する彼なる!」

34 我! げに我見たり。

而して我證明したり。羊の沖の二人と我と立

「此ぞ神の子なる!」

洗者ヨハネの證明(ヨハネ)



1 翌日、再度 ヨハネ 彼の弟子の中の二人と共に立ち  
歩めるイスを眺め詰めて、言ふ。

見よ！ 神の小羊！

37 かくて 彼の二人の弟子「ヨハネ」の 語れるを聞きて  
イスに随行せり。38 されど イス 振向き、随行せる彼等  
を視て、彼等に言ふ。

何を 汝等 求むるか。

彼等 彼に言へり。

ラファベ―！

「先生！」

汝！ 何處に留れるか。

ヒアリ語にて「ラファベ―」は「わが大なる者」わが尊敬

する者。アラミ語にて「ラファベ―」は「わが王」

第十刻は午後四時。

ペツロ(岩)らしい男)

クリスト(油を塗られたる者)

ケバ(ヒブリ語の岩)ペツロ(希臘語の岩)

39 「イス」 彼等に言ふ。

汝等 來れ。それ 汝等 視るならん。

故に 彼等 往きて、彼の 留れる處を見、而して 其

日、彼と共に留りぬ。時刻は 第十刻頃なりき。40 ヨハネ

より聞きて、「イス」に随行せし二人の中の一人は、シメオ

ン、ペツロの兄弟アンツレなりき。41 此(人) 最初に 己が

兄弟シメオンを見出し、而して 彼に言ふ。

我等 メシヤを見出したたり。

42 「アンツレ、シメオン」を イスの許に導きぬ。イス「シ

メオン」を眺め詰めて、言へり。

汝！ 汝は ヨハネの子シメオンなり。

汝！ 汝は「ケバ」と呼ばるべし。



1 翌日、「イス」出でて、ガリラにへと往かんと欲しぬ。  
而して、イス、ピリポを見出して、彼に言ふ。

汝、我に隨行せよ。

44 さて、ピリポは、アンヅレベツロの町のベスサイダの  
者なりき。45 ピリポ、ナタンエルを見出して、彼に言ふ。

我等、律法に於て、モーセの、又、預言者等の記し

し彼を

ヨセフの子なるナザレよりのイスを見出したたり。

46 ナタンエル、彼に言へり。

ナザレより、何の善き物か、出で能ふべきや?

ピリポ、彼に言ふ。

汝、來れ、汝、見よ。

47 イスは、己が許に來るナタンエルを見、而して、彼に就  
いて、言ふ。

見よ! 虚偽、無き眞のイスラエル!

48 ナタンエル、彼に言ふ。

何時より、汝、我を識れるか?

イス、答へて、彼に言へり。

ピリポの、汝を呼びし前、

汝、無花果樹の下に居る時、

我、汝を見たり。

49 ナタンエル、彼に答へぬ。

ラファベ!

汝! 汝こそ、神の子なるなれ!



汝！ 汝こそ イスラエルの王なるなれ！

150 イス 答へて、彼に言へり。

「我、無花果樹の下に居る汝を見たり」と

我 汝に言へるを以て、汝 信するか。

汝 此等よりも 更に大なる物を見ん。

51 「イス」 又 彼に言ふ。

アーメーン！ アーメーン！ 我 汝等に言ふ。

汝等 開けたる天と、人の子の上に、

昇り降りする神の使者等とを見ん。

六 カナの婚禮 (ヨハネ二)

21 かくて 第三日に、ガリラのカナに於て、婚禮ありし

が、イスの母も 亦 其處に在りき。而して イス 及

び 彼の弟子等も その婚禮にへと招かれぬ。時に 葡

萄酒 盡きければ、イスの母 彼に向ひて、言ふ。

葡萄酒！ 彼等に 葡萄酒 無し。

イス 彼女に言ふ。

我ど 汝どに 何か有らん。女よ！

未だ わが時刻 到らず。

5 「イス」の 母 給仕等に言ふ。

汝等 何なりとも、彼の 汝等に言ふ事を爲せ。

6 さて ユダヤ人の 淨潔の式に従ひて、各個 二三メツ

レテ入の石の水瓶六個 其處に据置かれければ、イス



彼等に言ふ。

汝等水瓶に水を満せ。

彼等其等を口まで満じければ、彼等に言ふ。

汝等今汲みて、宴會長に運べ。

さて彼等運びければ、宴會長は葡萄酒を爲された

る水を味ひし時、水を汲みし給仕等は知りしかど、

新郎を呼びて、彼に言ふ。

凡そ人は最初に、良き葡萄酒を供ふ。

されど彼等酔へる時は、劣れる葡萄酒なり。

汝は唯今まで、尙良き葡萄酒を保ちたり。

行ひ、而して彼の榮光を現しければ、彼の弟子等彼

10 宴會長は

を信じぬ。

七 カフルナフム住居

(マタイ四の三一―三六)

(ヨハネ二の一二)

4<sup>13</sup> かくて大(イス)ナザレを見棄

て、ゼブルンとナフタリとの境

に於ける海邊のカフルナフムに

入りて住めり、これ預言者イ

サヤを通じて言はれし事の全

うせられんが爲なり。曰く、

12 此のち、(イス)彼自

ら彼の母彼の兄弟等彼

の弟子等カフルナフ

ムにへと下りしが、久

しく其處に留らざり

カフルナフム住居(マタイ、ヨハネ)

セアルン(名) 角力(わ) 海邊(は) 湖(うみ) 一・二 書九



「海道」ガリラ  
湖をも海と云  
ヘゴ、此はダ  
マスコより地  
中海に達する  
大道ならん。○  
「ヨルダン」の  
彼方一は記者  
の立場次第に  
て河の東に何  
れどもなれど  
此處には河東  
ならん。

カファルナフム住居(マタイ)

4<sup>15</sup>ゼブルンの地！ ナフタリの地！

海道(の地)！ ヨルダンの彼方！

異邦人等のガリラ！

16闇黒に於て坐せる民！

彼等大なる光明を見ぬ！

死蔭の國に坐せる彼等！

彼等に光明昇れり！

八六

八 漁夫の弟子入

(マルコ一〇の二六—二七)

(マタイ四の二一—二二)

(ルカ一一の二)

「キネレス」は  
は、小立琴の  
名、其形似  
たるより名  
ける。恰も  
琵琶湖と云  
が如し。

1<sup>16</sup>かくて(イス)ガリラの海邊を  
過ぎつつ、海に  
於て、網を打ち居  
るシメオン、及  
びシメオンの  
兄弟アンヅレを  
見ぬ。彼は彼  
等漁夫なりけ  
ればなり。17(イス)  
彼等に言へり。

4<sup>18</sup>さて(イス)ガ  
リラの海邊を歩  
みつつ、海にへど、投  
網を打ち居る二人  
の兄弟なる「ベツロ」  
と云はるるシメオ  
ンと彼の兄弟アン  
ヅレとを見ぬ。そ  
は彼等漁夫な  
りければなり。19(イ  
ス)彼等に言へり。

5<sup>1</sup>さて、さる程に  
群衆(イス)に押迫  
りて、神の言を聞  
かんさせし際、彼  
自ら「キネレス」の  
湖畔に立ちて、湖  
畔に泊れる二艘の  
舟を見ぬ。されど  
漁夫等は、其等よ  
り離れて、網を洗  
ひ居たり。

漁夫の弟子入(マルコ、マタイ、ルカ)

八七



ザブダイ(わが賜) (ヤエの賜)

漁夫の弟子入(マルコ、マタイ、ルカ)

汝等 我が背後に来れ。

我 汝等を 人類の漁

夫と成らしめん、

18 かくて 彼等 直に

網を遺して、彼に隨行せ

り。(イス) 尙 少し進

み、ザブダイの子)ヤコブ

その兄弟ヨハネ 及び

舟に於て、網を整へ居

彼等を見て、直に 彼等

を呼びしかば、彼等

の父ザブダイを、雇人等

八八

汝等 我が背後に来れ。

我 汝等を 人類の漁

夫と爲さん。

4 20 さて 彼等 直に

網を遺して、彼に隨行せり。

(イス) 其處より進み、

彼等の父ザブダイと共に

舟に於て、その網を整へ居

れる他の二人の兄弟なる

ザブダイの子)ヤコブとそ

の兄弟ヨハネを見て、

彼等と呼ばしかば、彼等

ル

と共に、舟に遺し置きて  
「イス」の背後に往けり。

直に 彼等の舟と父とを  
遺して、「イス」に隨行せり。 カ

5 さて (イス) 船シメオンの有なりし一艘の舟に乗込み、  
彼に請ひて、陸より少し離れじめ、坐して、舟の中より  
群衆に教へ居たり。されど 語り終へけるや、(イス) シ  
メオンに向ひて、言へり。

汝 沖へど、乗出せ。

汝等 網を下して、漁れ。

シメオン 答へて、言へり。

師よ！ 我等 終夜、骨折りて、何をも獲ざりき。

されど 汝の言に基きて、我 網を下さん。

漁夫の弟子入(カル)

八九



此句は耶蘇の復活後のものならん。

漁夫の弟子入(カエル)

九〇

彼等然爲して、甚だ多量の魚を取籠め、彼等の網裂け始めければ、來りて、彼等を助くるやう、他の舟に於ける仲間に、合圖せるや、彼等來りて、兩方の舟に滿載し、其等殆ど沈む程なりき。さてシメオンベツロ(之を見、イスの膝下に平伏して、言へるは、

汝、我を遠ざかれ、ああ主!

それ我は罪深き男なり!

そは「ベツロ」及び「彼と共に居りし者も、同一同の漁りたる魚の獲物にをば、驚愕しければなり。尙又ザブダイの子にて、シメオンの仲間なりしヤコブもヨハネも同様なりき。イスシメオンに向ひて、言へり、汝恐るること勿れ。

汝、今より人類を生捕る者たらん。

かくて彼等舟を陸に寄せ、凡ての物を遺して、

「イス」に隨行せり。

九 カフルナフムの會堂にて教ふ

(マルコ二の二八)

(ルカ四の三七)

1 かくて彼等進みて、カフルナフムに入る。(イス)安息日に、會堂に入りて、直に教へ始めたるに、彼等彼の

カフルナフムの會堂にて教ふ(マルコ、ルカ)

九一



教には 膽を潰し居たり。彼は 彼等 權威を有てる者の如く、彼等に教へ居りて、文學士等の如くならざればなり。時に、不潔の靈に憑かれたる人、彼等の會堂に於て在りしが、忽ち 高く叫びて、<sup>24</sup>言へるは、我等 汝と 何の關係あらんや。ああ 汝 ナザレ人 イス!

彼の教には 膽を潰し居たり。これ 彼の言 權威に於て 在りしが故なり。時に、不潔の靈に憑かれたる人、會堂に於て 在りしが、大聲にて、高く叫べり。我等 汝と 何の關係あらんや。ああ 汝 ナザレ人 イス!

汝 我等を亡ぼさんとして 來りしや。我 知る、汝の 誰なるかを。ああ 汝 神の 聖なる者! イス 彼を叱りて、言へるは、 黙れ! 汝 彼より出で 來れ。爰に於て、不潔の靈 彼を 瘞撃させ、大聲に叫びて

汝 我等を亡ぼさんとして 來りしや。我 知る、汝の 誰なるかを。ああ 汝 神の 聖なる者! イス 彼を叱りて、言へるは、 黙れ! 汝 彼より出で 來れ。爰に於て、鬼 中央にへど 彼を 投倒し、 少も 彼を傷



彼より 出で來りければ、  
1<sup>27</sup> 彼等 諸共に怪み、相互  
に問合ひて、言へる程なり

き。  
これ 何事ぞ！ 新しき

教！  
權威を以て、彼 不潔の  
靈にすら 命せり。  
而も 彼等 彼に従ふ！

かくて イスの名聲 直に  
ガリラの全附近に、隅なく弘

くること無くして、彼より  
出で來りければ、  
愕然として、相互に語らひ、  
言へるは、  
これ 何たる言ぞや！

それ 權威と力とに於て  
彼 不潔の靈に命すれば  
彼等すら 出で來る！

かくて 「イス」に就ける  
噂 その附近の各處に、

まれり。

一〇ベツロの姑

弘まり居たり。

(マルコ一三四)

(マタイ一八七)

(ルカ一四一)

1<sup>20</sup> かくて 彼等 直に  
會堂より出往きて、  
コブ・ヨハネと共に、  
シメオン・アンヅレの  
家に入れり。  
メオンの姑 熱を病み

8<sup>14</sup> かくて  
イス ベツ  
ロの家に入  
り、熱を病  
みて、倒れ  
居る彼の姑

4<sup>38</sup> さて (イス、會  
堂より立上りて、  
シメオンの家へ  
と入れり。  
シメオンの姑 大  
熱に罹り居りしか

ベツロの姑(マルコ、マタイ、ルカ)



て、臥し居ければ、彼等直に彼女に就いて、  
「イス」に言ふ而して、  
彼近寄り、手を握りて、  
彼女を起しければ、  
熱は彼女を去り、  
彼女は彼女等に事へ始めたり。

を見、  
8<sup>15</sup> 彼女の手を觸りしかば、  
熱は彼女を去り、  
彼女は彼女等に事へ始めたり。

九六  
ば、彼等彼女に就いて、  
彼に請へり、  
4<sup>30</sup> 而して、  
彼女の傍に立塞がりて、  
熱を叱れるや、  
(熱は) 彼女を去り、  
彼女は忽ち立上りて、  
彼等に事へ始めたり。

1<sup>32</sup> さて、夕と成りて日の入りし時、  
(人) 病める者鬼に憑

8<sup>16</sup> さて、夕と成りし時、  
(人)

4<sup>40</sup> さて、日の入る時、  
種種の疾病に罹れる患者を有てる程の者、  
諸

かれたる者一同を、  
「イス」の許に齎し、  
33 かつ、  
全町戸口に集まり居たりき。  
かくて、  
彼種種の疾病を患へる多数の者を齎し、  
又多数の鬼を投出し、  
鬼に言ふことを許さざりき。  
これ、  
彼等彼のメシヤなることを知りたるが故なり。

(人) 鬼に憑かれたる多数の者を「イス」の許に齎しければ、  
又、  
言にて、  
霊を投出し、  
病める者一同を醫

九七  
共に、  
彼等を「イス」の許に連れ来りければ、  
彼等一人一人に按手して、  
彼等を醫し居たり、  
尙又、  
汝は、  
神の子なり、  
と言ひて、  
叫びつ、  
鬼、  
多数の者より出でければ、  
彼等、  
を叱りて、  
言ふことを許さざりき。  
これ、  
彼のメシヤなることを知りたるが故なり。



ベツロの姑(マルコ、マタイ、ルカ)

せり。

り。

8<sup>17</sup>これ 預言者イエサヤを通じて、言はれし事の 全うせられんが爲なり。

彼 自ら 我等の疾患を受けぬ。

彼 自ら 我等の病苦を負ひぬ。

一 一 癩病及び中風患者

(マルコ一の一四)

1<sup>40</sup>時に、一人の

(マタイ八の二一)

8<sup>2</sup>時に 見

(ルカ五の二六)

5<sup>12</sup>さる程に、「イス」の

癩病人「イス」の

許に來りて、跪

き、彼に願ひて

言へるは、

もし 汝 諾

せば、汝 我

を潔め能ふ!

よ! 一人

の癩病人

近寄り、「イ

ス」を拜して

言へるは、

主よ! もし

汝 諾せば 汝

を潔め能ふ!

町に於て 在りしに、見

よ! 癩病だらけの男!

彼 イスを見て、平伏し

彼に願ひて、言へるは、

主よ! もし

汝 諾せば、汝

を潔め能ふ!

41 (イス) 斷腸の念に

堪へず、彼の手を伸

べて、觸り、而して

3 (イス) 手を伸

べ、彼に觸りて

言へるは、

13 (イス) 手を伸

べ、彼に觸りて

言へるは、

癩病及び中風患者(マルコ、マタイ、ルカ)



彼に言ふ。

我、諾す。

汝、潔まれ。

142 かくて癩病

に彼を去りて、

潔まれり。(イヌ)

厳しく彼を戒め、

直に彼を投出して

44 彼に言ふ。

汝、慎め。

誰にも語ることを勿れ。

我、諾す。

我、諾す。

かくて直

に彼の癩

病、潔まれ

り。イヌ

彼に言ふ。

143 かくて癩病、直に彼を去れり。イヌ、誰にも語らず、ただ往きて、祭司に示すやう、彼に命じぬ。

汝、慎め。

誰にも語ることを勿れ。

ル

ただ退け。汝、己を

ただ退け。汝、己を

カ

汝の潔まり

し事を彼等

に證明のため、

モーセの命

せし程の物を

獻げよ。

45 されど彼、出往きて、

多数の事を宣べ、その話を

弘め始めれば、「イヌ」は

汝、彼等に證明の

ため、

モーセの命

せし程の物を獻げよ。

45 されど「イヌ」に就

て、多数の事を宣べ、

その話を弘め、

始め、群衆(教)を聞き、

51B 汝の潔まり

し事を彼等

に證明のため、

モーセの命

せし如くに、

獻げよ。

51C されど「イヌ」に就

て、多数の事を宣べ、

その話を弘め、

101



最早 公然 町に入るこ  
能はず、ただ 外部の寂し  
き場處に居りし程なりき。  
而も 彼等 諸方より、絶  
えず 彼の許に來り居たり。

イ タ マ

21 かくて 數日の後、  
(イス) 再度 カフルナ  
フムに入れるや、「彼  
家に於て、在り！」と 聞  
えければ、多數の者  
集められ、戸口すら

91 かく  
て (イ  
ス) 舟  
に 乘  
り、  
渡  
り、  
而

1011  
かつ その病を醫され  
んとて、集まり始めし  
が、(イス) 自ら退き  
寂しき場處に於て、而  
も 祈りつつ、在りき。

517 さる程に、一日、(イ  
ス) 自ら教へ居りしに、  
ガリラ・ユダヤの村村  
及び イエルサレムより  
出で來り居りしパリサ  
イ人律法教師等も 亦

隙間 無き程なりき。  
而して 彼 言を 彼  
等に語り始めたり。

して、  
己が町  
にへと  
到れり。

3 時に 四人に昇か  
れたる中風の者を携  
ふる「人人」(イス)の許  
に來りしも、群衆の  
爲に、「イス」に齎すこ  
と能はざれば、彼の  
居りし處の屋根を捲  
り、此を穿ちて、中

92 時に、  
見よ！  
(人人) 床  
の上に横  
はれる中  
風の者を  
彼に齎せ  
り。 (イ  
ス)

坐し居たり。而して  
(病)を癒すべきヤエの  
能力 彼と共に 在り  
き。

518 時に、見よ！ 一人  
の中風を病み居りし所  
の人を、床に載せて、運  
べる男等 彼を運び入  
れて、「イス」の前に置か  
んと努めたれども、群  
衆の爲に、彼を運び入  
る手段 無く、屋根



風の者の臥し居る  
寢床を吊下す。イス  
彼等の信仰を見て、  
中風の者に言ふ。

彼等の信仰  
仰を見て  
中風の者  
に言へり。

に上り、死を穿ちて、  
小床のまま、彼を  
スの前の中央にへど下  
せり。彼等の信仰  
を見て、言へり。

兒よ！  
汝の罪を赦さ  
る！

勇め、兒よ！  
汝の罪を赦さ  
る！

人よ！  
汝の罪を赦  
さる！

居りし或る文學士等

よ！時に、  
或る文

時に、文學士バ  
リサイ人等論じ

アラスフェミ  
ハレンエミ  
ナリ、其強キ  
ナリ、出現ス  
意義を見出す  
ハ語を見出す  
能適

彼等の心に於て、論じ  
居たり。

學士等自ら

始めて、言へるは、

何すれぞ 此人  
かく語る！ 彼

此人 衰  
潰す！

誰ぞ 衰 潰を  
語る此人！

神 一人の外 誰  
か 罪を赦し能ふ

………

神 一人の外  
誰か 罪を赦し

べき！

………

能ふべき！

かくて イス 直

かくて イ

されど イス

に 彼等がかく  
自ら論ずることを、  
彼の靈に於て、明に

ス 彼等の思  
慮を知りて、  
言へり。

彼等の論ずるこ  
とを、明に識りて  
答へ、彼等に向ひ



識り、彼等に言ふ。

何故に汝等の心に於て、汝等此等の事を論ずるか。それ中風の者に「汝の罪赦さる！」と言ふと、或は、「汝起きよ。汝の寢床を上げよ。」

て、言へり。

何故に汝等の心に於て、汝等惡き事を思ふか。それ「汝の罪赦さる！」と言ふと、或は、「汝起きよ。」

何故に汝等の心に於て、汝等論ずるか。それ「汝の罪赦さる！」と言ふと、或は、「汝起きよ。」

歩め」と言ふと、何れか易き！  
「されど人の子が地上にて、罪を赦す權威を有てることを、汝等知り得るやう、……」

何れか易き！  
「されど人の子が地上にて、罪を赦す權威を有てることを、汝等知り得るやう、……」

何れか易き！  
「されど人の子が地上にて、罪を赦す權威を有てることを、汝等知り得るやう、……」



汝に我言ふ。

汝起きよ。汝

の寢床を上げよ。

汝の家にへと退

け。

2<sup>12</sup>かくて彼起

き、直に寢床を

上げて、凡ての者

の前を、出往きけ

れば、「我等未だ

曾て斯る事を見

ざりき」と言ひ、一

………

汝起きよ。

汝の床を上げ

よ。汝の家に

へと退け。

9<sup>7</sup>かくて彼

起きて、己が

家にへと赴き

しかば、群衆

見て、恐れ、

かつ人間に

斯る權威を興

汝に我言ふ。

汝起きよ。汝

の小床を上げよ。

汝の家にへと進

め。

5<sup>25</sup>かくて彼忽ち

彼等の前に、立上り

て、己が臥し居た

所の物を上げて、

神に榮光を歸しつ

つ、彼の家にへと赴

けり。(八人) 諸共に

同魂消て、神に榮光を歸する程なりき。

へたる神に榮光を歸せり。

魂消て、神に榮光

を歸し始め、かつ

恐れて、言へるは、

我等今日、不思議な

物を見たり!

一二

税吏マタイ

イ

(マルコ二の二三―二七)

(マタイ九の九―一三)

(ルカ五の二七―三二)

2<sup>13</sup>かくて(イス)衆一同彼の許に來りければ、彼

再度、海邊に出往きしに、群衆

イタマル

税吏マタイ(マルコ、マタイ、ルカ)



アルバイ(變化、過渡)

始めたり。

214 かくて (イス)

通りがけに、收

税所の傍に坐す

るアルバイの子

レキを見て、彼

に言ふ。

汝 我に隨行

せよ。

彼 立上りて、

「イス」に隨行せ

99 かくて イス

其處より通りがけ

に、收税所の傍に

坐する「マタイ」と云

はるる人を見て、

彼に言ふ。

汝 我に隨行

せよ。

彼 立上りて

「イス」に隨行せ

527 かくて 此等の

事の後、(イス) 出

往きて、收税所の

傍に坐する「レキ」と

名づくる税吏を視

て、彼に言へり。

汝 我に隨行

せよ。

凡ての物を遺し、

「イス」に隨行せ

215 かくて 彼の家に於

て、**「イス」**食に就ける

時、多數の税吏罪人等

も **「イス」** 及び 彼の

弟子等と共に、食に就

き居たり。そは 彼等

多數 在りて、彼に隨

行し居たればなり。16

リサイ人の文學士等

(**イス**が) 罪人、税吏等

共に、食し居るを見て

910 さる程に、

**「イス」** 家に於

て、食に就け

る時、見よ!

多數の税吏罪

人等 來りて

**「イス」** 及び

彼の弟子等と

共に、食に就

き居たり。11

リサイ人等

529 かくて レキ

己が家に於て、

**「イス」**の爲に、盛

なる歓迎會を催

しけるに、彼等

と共に、食に就

き居りし者は

税吏などの大な

る群衆なりしか

ば、<sup>30</sup> パリサイ人

及び その文學

税吏マタイ(マルコ、マタイ、ルカ)

一一一



彼の弟子等に言ひ始めたり。

見て、彼の弟子等に言ひ始めたり。

士等彼の弟子等に向ひ、吐き

彼は 税吏罪人等と共に、食し居るか。

何の理由にて、汝等の先生は

何の理由にて、汝等 税吏罪人

食し居るか。

税吏罪人等と共に、食し居るか。

等と共に、食し、且 飲み居るか。

217 イエス 聞きて

912 されど イエス

531 イエス 答へて、

彼等に言ふ、強き者は 醫者を要せず。されど 病め

聞きて、言へり。強き者は 醫者を要せず。されど 病める

彼等に向ひ、言へり。壯健なる者は 醫者を要せず。されど 病める

者のみ。

者のみ。

者のみ。

……

汝等の進みて、學べ。これ 何の謂なるか。

……

……

我 仁慈を欲す。されど 犠牲に

……

……

非ず。我 義人

……

我 義人を招かん

そは 我 義人を招かん

我 義人を招かん

……

……

……

……

……

……



税吏マタイ(マルコ、マタイ、ルカ) 一四  
來りしなり) ければなり) 一四  
て(來りしなり)

一三 耶蘇 ユダヤに入る (ヨハネ 三〇)

3 此等の事の後に、イエス及び彼の弟子等、ユダヤの地に到り、彼等と共に、其處に留りて、洗し居たり。23 さてヨハネも亦サレムに近きアイノンに於て、洗し居たり。これ彼處に水多かりければなり。而して(人)來りて、洗せられ居たり。24 そはヨハネ未だ監獄に投せられざりければなり。  
25 故にヨハネの弟子等の(或者)と(二人)のユダヤ人と、  
26 淨潔に就ける質問起れり。而して 彼等ヨハネの許

に來りて、彼に言へり。

ラブベー！  
ヨルダンの彼方にて、汝と共に在りし彼！

汝の證明したる彼！  
見よ！此者洗す！  
而して凡ての者彼の許に到る！

27 ヨハネ答へて、言へり。  
天より彼に與へられたるに非ざれば、  
人は何物をも受くること能はず。

28 我！我はメシヤに非ず。  
されど彼の前に派遣せられたる者なりと



耶蘇 ユダヤに入る(ヨハネ) 一一六  
我が言へることを、汝等自ら我に證明す。

29 新婦を有てる彼は、新郎なり。  
されど立ちて、聞ける新郎の友は、  
新郎の聲の故に、大に喜ぶ。  
故に、このわが喜悅、満されたり。

30 彼盛ならざる可らず。  
されど我衰へざる可らず。

一四 ニコデモの質問 (ヨハネ 三の二一)

ニコデモ(民の勝利者)

31 さて、ユダヤ人等の長にて、パリサイ人等の中に「ニコデモ」と名づくる人ありき。此(人)夜「イス」の許に來りて、彼に言へり。

ラフベー!

我等知る、汝は、神より來りし先生なり。

そは、神、彼と共に在るに非ざれば、一人だも、

汝の爲しし此等の證徴を爲し能はざればなり。

3 イス答へて、彼に言へり。

アーマーン! アーマーン! 我、汝に言ふ。

誰にても、新に生れずば、神國を見ること能はず。

4 ニコデモ、彼に言ふ。

老いたる人、如何にして、生れ能ふか。

ニコデモの質問(ヨハネ)



再度、その母の胎に入りて、生れ能ふか。

3 イス答へぬ。

アーメーン！アーメーン！我、汝に言ふ。

水と霊との中より生るるに非ざれば、

何人も神國に入るに能はず。

6 肉の中より生れたる物は、肉なり！

霊の中より生れたる物は、霊なり！

7 汝等、新に生れざる可らずと

8 我が、汝に言ひしことを、汝、怪む勿れ。

9 風は、何處にても、其の、欲するままに吹く。

風(聖)

而も、汝、その音を聞く。

されど、汝、其の、何處より來り、

又、何處へ、退くやを知らず。

凡そ、霊の中より生れたる者も、亦然り。

9 ニコデモ、答へて、彼に言へり。

如何にして、此等の事、成り能ふか。

10 イス、答へて、彼に言へり。

汝！汝は、イスラエルの先生なり！

而も、汝、此等の事を識らざるか。

11 アイメーン！アイメーン！我、汝に言ふ。



それ 我等 知れる事を語り、視たる事を証明す。

而も 汝等 我等の証明を受けず。  
地上の事を 我 汝等に告げてすら、汝等 信せず。  
我 汝等に 天上の事を告ぐるとも、如何で 汝等 信せんや。

一人だも 天に上りたる者 無し。

人の子 即ち 天より下りたる彼の外、

正に斯く 人の子も 掲げられざる可らず。

永遠の生命を有たしめんとてなり。

かく迄も 彼 世を愛しければなり。

これ 凡そ 彼を信する者をして、亡びず、

されど 永遠の生命を有たしめんとてなり。

そは 神 その獨子を與へし程に、

ざりければなり。

されど 彼を通じて、世の 救はれんが爲なりき。

彼を信する者は 審判せられず。

これを信せざる者は 既に審判せられたり。

これ 神の獨子の名を信せざりしが故なり。



319 これ 即ち 審判なり。

それ 光明は 千世に入り来りたり。

而も 人間は 光明よりも 闇を愛せり。

そは 彼等の 行爲 常に 悪かりければなり。

20 そは 凡そ 邪曲なる 事を爲す者は 光明を憎み、

而して 彼 光明の 許に 来らざればなり。

これ 彼の 行爲の 責められざらんとてなり。

21 されど 眞理を行ふ彼は 光明の 許に 来る。

これ 彼の 行爲の 現れんが爲なり。

これ 神に 於て 行はれたる 物なればなり。

31 上より 来れる 彼は 凡ての 物の上 に 在り。

地より 出でし 彼は 地より 出でし 者なり。

而して 地より 出でし 事を 語る。

天より 出で来れる 彼は 凡ての 物の上 に 在り。

32 彼 その 視し 所聞きし 事を 證明す。

而も 一人 だも 彼の 證明を 受けず。

33 彼の 證明を受けし 者は、

「神は 眞實なり」と 證印せり。

34 そは 神の 派遣せし 者の 神の 言を 語ればなり。

そは 彼 無量に 靈を 與ふればなり。



35 父は子を愛す。

而して凡ての物を彼の手に與へたり。

子を信する彼は永遠の生命を有つ、

されど子に従はざる彼は生命を見じ。

反て神の震怒彼の上に留まる！

ルカ 4:14-17  
ヨハネ 1:13-14  
マタイ 23:25-26  
マルコ 1:1-4

第四章 ガリラヤ宣教

ガリラヤ巡回

(マルコ 1:1-4)

(マタイ 23:25-26)

(ルカ 4:14-17)

(ヨハネ 1:13-14)

14 かくてヨハネの渡されし後、イスの福音を説教し、

4:12 さてヨハネの渡されしことを聞きて、(イ)スガリラヤに於て、

4:14 かくて、

4:15 故に主スバリサイ人等のイスは、ヨハネよりも多数の弟子を造り、

かつ「洗す」と聞けることを識りしかば、ただひと

イス自ら洗せず、ただ

ガリラヤを三  
周する巡回傳  
道に四ヶ月の  
日子を費した  
るならん。

ガリラヤ巡回(マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ)



ヨハネの福音書  
第二章  
第十節

つづ、ガ  
リラにへ  
と赴けり。

ラにへと  
退けり。

にへと  
歸れり。

彼の弟子等のみ(洗せ)か  
ごユダヤを去りて、再  
度ガリラにへと赴けり。

ガリラ巡回(マルコ、マタイ、ヨハネ)

15 而して

(イス)

4 其時より、

イス

4 かくて、

言へるは、

説教して、言ひ始めぬ。

スに就ける時

時期は

満ちた

全附近に弘ま

神國は

近づき

り、凡ての者

汝等

汝等

ら

心を改め

心を改めよ。

彼等の會

第四章

ガリラ巡回

光に歸せられ

汝等 福音に於  
て、信せよ。

そは 天國は 近  
づきたればなり。

堂に於て、教

かくて

朝早く、

夜の未

マ

4 かくて、晝と成り

だ明けざるに、(イス)

起上り、

タ

寂しき場處にへと

出でて、寂しき場處にへと赴き、

タ

進みけるに、群衆

其處にて、祈り居たり。而して

イ

彼を尋ね始めて、

シメオン、及び(イス)と共に居

イ

彼の許に到り、而

りし彼等も、彼を追懸け、彼を

イ

して、彼等を離れ

見出して、彼に言ふ。

イ

去らざるやう、彼

言凡ての者、汝を求めむ。

イ

を引止めんとせり

ガリラ巡回(マルコ、マタイ、ルカ)



1<sup>38</sup> 而して (イエス) 彼等に  
言ふ。

いざ 我等をして 往

かしめよ。

他の處へ 附近の諸町

村にへど。

亦 我 彼處にても

亦 説教することを得

ん。

そは 之が爲に、 我

出で來りければなり。

4<sup>48</sup> されど (イエス) 彼等に  
向ひて、言へり。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

ルカ四の四四  
には「ガリラヤ」  
の代りに「エ  
サヤ」もあ  
るなり。

ルカ八の一以  
下の巡回は第  
五項の「十二  
使徒」を選抜  
したる後の事  
と知るべし。

39 かくて (イエス)  
彼等の會堂に入  
りて、説教し、  
かつ 鬼を投出  
しつつ、全ガリ  
ヤに到れり。

4<sup>35</sup> かくて (イエス)  
會堂に於て、教  
音を説教し、人  
民に於ける疾  
病を醫しつつ、  
全ガリラヤ中  
を巡回し居たり。

4<sup>44</sup> かくて  
(イエス)「ガリ  
ヤ」の諸會堂  
に入りて、  
説教しつつ  
在りき。

4<sup>24</sup> かくて (イエス)の噂  
全スリヤにも弘まりぬ  
而して (人人) 病める  
者一同 種々の疫癘・痛苦に  
患かれたる者、癩  
癩の者、中風の者、  
を、彼の

8<sup>1</sup> さる程に、引續き、(イエス) 説  
教し、かつ 神國の福音を宣べ  
つつ、町町村村を巡回し居りし  
が、十二人の者も 彼に伴ひ居  
たり。而して 會で 惡靈持病

ガリラヤ巡回(マタイ、ルカ)



ミグダエル  
(神の高樓)  
デカボリ(十  
個町)  
シユシヤナ  
(百合)

ガリラ巡回(マタイ、ルカ)  
許に齋しければ、彼  
彼等を醫せり<sup>4</sup>、かくて  
ガリラ・デカボリ・イ  
ルサレム・ユダヤ・ヨ  
ルダンの彼方より、夥  
しき群衆「イス」に隨行  
せり。

二

斷食に関する論争

一三〇  
等より醫されたる或る女等 卽  
ち七の鬼の出でたる「ミグダ  
ルエルの女」と呼ばるるマリヤ・  
8<sup>3</sup>ヘロデの家令クレーザの妻ヨハ  
ナ・シユシヤナ 及び多數の別の  
女等 己が財産を供して、彼等  
に事へ居たり。

(マルコ二の八)

(マタイ九の二四)

(ルカ五の三三)

2<sup>18</sup>かくてヨハネの弟  
子バリサイ人等 斷食  
し居たり。しかば、  
て、「イス」に言ふ。  
ヨハネの弟子  
等もバリサイ  
人の弟子等も  
斷食す。  
然るに 汝の  
弟子等は 何  
の理由にて 斷  
食せざるか。

ヨハネの弟  
子バリサイ  
人等もバリ  
サイ人の弟  
子等も斷食  
す。然るに  
汝の弟子等  
は何の理由  
にて斷食せ  
ざるか。

我等もバリサ  
イ人等も斷  
食す。然るに  
汝の弟子等  
は何の理由  
にて斷食せ  
ざるか。

ヨハネの弟子等は  
屢斷食し、かつ  
祈禱を爲す。  
バリサイ人の弟子  
等も亦同じ。  
然るに 汝の弟子  
等は 食し、かつ  
飲む。

斷食に関する論争(マルコ、マタイ、ルカ)

一三一



2<sup>19</sup> 而して イス 彼等に言へり。

新郎 彼等と共に居る時、婚筵の客如何で断食し能はんや  
彼等 新郎と共に居る間、断食する能はず。  
20 されど 彼等よ

9<sup>15</sup> 而して イス 彼等に言へり。

新郎 彼等と共に居る間、婚筵の客如何で悲み能はんや。  
されど 彼等

5<sup>34</sup> されど イス 彼等に向ひて、言へり。

新郎 彼等と共に居る時、汝等婚筵の客をして如何で断食せしめ能はんや。  
25 されど 日 來

り 新郎の取り去らるる日、來らん。  
かくて 其時、其日に 彼等 断食せん。

誰も 新しき布片の補綴を古き上着に補がず。

より 新郎の取り去らるる日、來らん。  
かくて 其時、彼等 断食せん。

誰も 新しき布片の補綴を古き上着に當

らん。而も 新郎 彼等より取り去られん時、其時、其等の日に、彼等 断食せん。  
36 尙又 「イス」 彼等に向ひて、比喻を言ひ居たり。

誰も 新しき上着より裂きたる補綴を古き上



もし然爲さば、補綴は此を新しきは裂きて、破綻更に甚しく成る。

又誰も新しき葡萄酒を古き革囊に注込まず。

てす、

そはその補綴上着を裂きて、破綻更に甚しく成ればなり。

(人人)新しき葡萄酒を古き革囊に注込まず。

一三四

着に當てず。

もし然爲さば、彼新しきものを裂かん。而も新しきものよりの補綴は古きものに似合

はざらん。又誰も新しき葡萄酒を古き革囊に注込まず。

もし然爲さば、葡萄酒は革囊を裂かん。

而して葡萄酒も革囊も共に廢る。

されど新しき葡萄酒を新しき革囊に(注込む)

もし然爲さば、革囊裂けて、葡萄酒

而して革囊も亦廢る。

されど(人人)新しき葡萄酒を新しき革囊に注込む。

もし然爲さば、新しき葡萄酒は革囊を裂

而して其も流され、革囊も亦廢らん。

されど新しき葡萄酒を新しき革囊に注込む。

古き葡萄酒を飲



断食に関する論争(マルコ、マタイ、ルカ)

223 さる程に [イス]

121 其節 [イス]

6 さる程に [イス]

一三六

む者は、誰も新しき葡萄酒を欲せず。古きものは佳しと言へばなり。

安息日に、麥島を通れるに、彼の弟子等、道すがら、穂を摘み始めければ、パリサイ人等彼に言ひ始めたり。

息日に、麥島を通るに、彼の弟子等、飢ゑしかば、彼等穂を摘みて食し始めけるが、パリサイ人等見て、彼に言へり

「麥島を通れるに、彼の弟子等、穂を摘み、手に揉みて、食しければ、或るパリサイ人等言へり。

弟子等と安息日(マルコ、マタイ、ルカ)

一三七

かくて [イス] 答



彼等に言ふトス

彼等に言へり

一三八 彼等に向ひて言へり

汝等未だ曾て讀まざりしか。ダビドが何を爲ししかを。彼自も亦彼の伴へる者等も窮して飢ゑし時

汝等未だ曾て讀まざりしか。ダビドが何を爲ししかを。彼自も亦彼の伴へる者等も飢ゑし時

一三九 汝等未だ曾て此を讀まざりしか。ダビドが何を爲ししかを。彼自も亦彼の伴へる者等も飢ゑし時

エペサナル大なる者はサムエルの前書に於て祭司は此時の祭司はアホメの兄弟に於て非エアサナルに

226 エペサナルの時

祭司长たりしか如何に彼神の家に入りしかを。而して祭司等の外は食すまじき供獻のパンを食し。かつ彼と共に居りし者等にも

124 如何に彼神の家に入りしか

而して。獨り祭司等の外は彼自も亦彼の伴へる者等も食すまじき供獻のパンを彼等

64 如何に彼神の家に入り

而して。獨り祭司等の外は食すまじき供獻のパンを取りて、彼も食し。亦彼の伴へる



弟子等と安息日(マルコ、マタイ、ルカ)  
 與へしかを。食せしかを。者等にも與へ  
 27A (イス) 又 彼等に言  
 ひ居たり。 イタマ  
 65A (イス) 又 彼等に言

125 或は 汝等 律法に於て、未だ曾て讀まざり  
 しか。 安息日に、祭司等は、宮に於て、安息日を濱

せども、彼等 罪無きことを。

7 されど 我 汝等に言ふ。 此處に 在り！  
 されど 我 汝等 我 仁慈を欲す。 犠牲

コ

に非すとの 何の謂なるかを 無辜の者等を罪  
 識りしならば、汝等 敢て 無辜の者等を罪  
 せざりしならん。

27B 安息日は 人の故

に 設けられぬ。 人は 安息日の故

に非す。

28 されば 人の子は

又 安息日の主たる  
 なるなり。

128 是は 安息日の  
 主たるなり。

65B 人の子は 安  
 息日の主たる  
 なり。



四 萎えたる手

(マルコ 一六三)

(マタイ 一四二)

(ルカ 一六の 六一)

31 かくて「イエス」再度、會堂に入りしに、萎えたる手を有てる人其處に在りき。

129 かくて「イエス」其處より移りて彼等の會堂にへど到りしに、見よ！萎えたる手を有てる人！

66 さる程に、「イエス」別の安息日に、會堂に入りて、教へ居れるに、其處に右の手の萎えたる人

在りき。されど「イエス」を告訴せん由も

告訴せんとして、安息日に、「其人」

(人)「イエス」を

手有てる人！

(人)「イエス」を告訴せんとして、彼

に質問して、言へるは

安息日に、醫すは可きや。

がなど、彼安息日に、醫すやを、傍より窺ひ居たり。

に、醫すやを、傍より窺ひ居たり。

を醫すやを、傍より窺ひ居たり。

「イエス」手の萎えたる人に言ふ。

汝中央にへと立て。

マ 66 されど「イエス」自ら 彼等の思念を知りて、萎えたる手を有てる男に言へり。

タ 汝 起きよ。汝中央にへと立て。

イ 彼 起上りて、立てり。

に質問して、言へるは

安息日に、醫すは可きや。

がなど、彼安息日に、醫すやを、傍より窺ひ居たり。

に、醫すやを、傍より窺ひ居たり。



妻はたる手(マルコ、マタイ、ルカ)

3 4A (イス) 又

12 11A されど [イス] 彼等に言へり。

6 9 されど イス 彼等に向ひて言へり。

一四四

安息日に、善を爲すべ

きか。將悪を爲すべ

きか。將悪を爲すべ

魂を救ふべきか、將

殺すべきか。

我 汝等に質問す。

安息日に、善を爲すべ

きか。將悪を爲すべ

魂を救ふべきか。將

亡ぼすべきか。

マ

12 11B 汝等の中、人誰かただ一匹の羊を有てる者有らんか。買問うて、

ル

マ

タ

イ

ル

コ

而して もし 安息日に、其(羊) 坑に陥らん

に、 彼(其羊)を攫まざらんや。而して 上げざらんや。

況て 人の羊に優れること 幾許ぞや。

されば 安息日に、良く爲すは 可し。

3 4B されど 彼等 黙し居たり。

「イス」 怒を含みて、彼等を眺

め廻し、彼等の心の 頑固なる

ことを憂ひつつ、その人に言ふ。

12 13 其時

6 10 かくて (イス) 彼等一同

を眺め廻して

「其男」に言へり。

妻はたる手(マルコ、マタイ、ルカ)

二四五



「悔」さばガリ  
ヲ圖のこま

37 かくて イス 彼の弟  
子等と共に、海の方に避  
けしに、夥しき大衆ガ  
リラより隨行せり。又  
ユダヤよりも、イエルサレ  
ムよりも、イヅマヤ・ヨル  
ダンの彼方ツロ・シドン附  
近よりも、夥しき大衆

耶穌の名聲(マルコ、マタイ、ルカ)

(マルコ一三)

(マタイ一五)

12 15A さて  
イス 識りて  
其處よ  
り、避  
けしに  
多数の  
者 彼

6 17 かくて 「イス」 彼  
等と共に下りて、平  
なる場處に立ちしに  
彼の弟子等の夥しき  
群衆と、全ユダヤ・イ  
エルサレム・ツロ・シドン  
沿岸の人民の夥しき  
大衆と、彼に聞き、

一四七

(ルカ一七)

五 耶穌の名聲

汝 汝の手を伸べ  
よ。 汝の手に伸べしに、その  
彼 伸べしに、その  
手 舊に復せり。而  
して、パリサイ人等  
出往きて、直にへ  
ロテ黨の者等と共に  
如何にしてか、「イス」  
を亡ぼさんものをと  
協議し居たり。

萎れたる手(マルコ、マタイ、ルカ)

汝 汝の手を伸  
べよ。 彼 伸べしに、その  
の 手 他(手)の如  
く、健全に復せり。  
12 14 されど、パリサ  
イ人等如何にし  
てか、「イス」を亡ぼ  
さんものをと、出  
往きて、協議せり。

汝 汝の手  
を伸べよ。 彼 然(然)爲し  
しに、その手  
舊に復せり。  
6 11 されど、彼  
等 狂愚の極  
イスに 何を  
爲さんかと、  
相互に語り居  
たり。

一四八



彼の爲しに程の事を聞きて、彼の許に来れり。

に隨行せり。

かつ、彼等の疫癘を醫されんこと、來れり。

多くて「イス」群衆の爲に押潰されざるやう、小舟を其

多くて「イス」に觸らんことを求ければ、全群衆

彼の弟子等に言へり。10そは

「イス」に觸らんことを求ければ、全群衆

彼多數の者を醫しければ、

「イス」に觸らんことを求ければ、全群衆

患へる程の者は、彼に觸らんとて、彼に押重なり居たれば

「イス」に觸らんことを求ければ、全群衆

なり。不潔の靈も亦「イス」を視

「イス」に觸らんことを求ければ、全群衆

る毎に、彼の前に平伏し、叫びて、言へるは、

汝！ 汝は 神の子なり！

而も「イス」已を公に爲さざるやう、嚴しく彼等を戒め居たり。

かつ、已を公に爲さざるやう、「イス」彼等を戒めぬ。

イエサヤ書四の二一四。

12 17 此れ 預言者イエサヤを通じて、言はれし事の 全うせられんが爲なり。曰く、

18 見よ！ 我が 選びしわが僕！

わが魂の 樂める我が 愛する者！

耶穌の名聲(マタイ)



耶穌の名聲(マタイ)

我わが靈を 彼の上に置かん、  
彼審判を 異邦人に宣せん。

權利をも主張せず。

12 彼 争ふまじ。 彼 叫ぶまじ。  
誰も 衢にて 彼の聲を聞くまじ。

弱きを虐げぬ。

20 彼 踏付けられたる葦を折らじ。  
彼 煙れる麻をも熄さじ。

「煙れる麻」は 薄暗い燈心。

正義をして最後の勝利たらしむ。

彼 審判を 勝利にへと投出すまで、

………  
彼の名に 異邦人も 亦 望を屬せん。  
………

六 十二使徒

(マルコ三の二三—一九)

(マタイ一〇の二—四)

(ルカ六の一二—一六)

13 かくて (イス) 山にへと  
登り、<sup>13</sup> 己が 欲しし 彼等を  
呼びしに、 彼等 彼の許に  
到りければ、<sup>14</sup> 彼 十二人を  
擧げて、「使徒」と名づけぬ。

10 さ  
て 此等  
は 十二

6<sup>12</sup> さて 暮さる程に、  
此等の日に、(イス)  
祈らんとて、 出でて  
山に入り、 終夜 神  
に 祈り 居たりき。

十二使徒(マルコ三の二三—一九)

一五二



十二使徒(マルコ、マタイ、ルカ)  
 これ 彼等をして 彼と共  
 に居らしめ、かつ 彼等を  
 説教の爲に派遣し、<sup>3, 15</sup>又  
 を投出す權威を有たしめん  
 とてなり。 <sup>10, 42</sup>即ち  
 十二人を  
 挙げぬ。

使徒  
 の名  
 第一

一五二  
 くて 晝と成りし時  
 (イス) 彼の弟子等を  
 呼寄せ、 彼等の中よ  
 り、 十二人を選びて  
 「使徒」と名づけぬ。

ベツロシメオンに  
 付けし名

シメオン「ベツ  
 ロ」ミツ  
 云は  
 るは

6-14 シメオン「ベツロ」ミ  
 名付けし

3-17 ヤコブ ザアダイ  
 の(子)

アンヅレ 彼の  
 兄弟

アンヅレ 彼の  
 兄弟

ヨハネ ヤコブ  
 の兄弟

ヤコブ ザアダイ  
 の(子)

ヤコブ

「ペネレゲシユ」は 彼等  
 に付けし名にて「雷の子」  
 なる義

バルトルマイ  
 の(子)

18  
 アンヅレ  
 ビリボ、  
 バルトルマイ。

10-3  
 ヨハネ 彼の  
 兄弟  
 10-3  
 ビリボ、  
 バルトルマイ

ヨハネ、  
 ビリボ、  
 バルトルマイ。

マタイ(雙兒)

マタイ

テオム

15  
 マタイ

テオム  
 ヤコブ アルバイ  
 の(子)

マタイ 吏税  
 ヤコブ アルバイ  
 の(子)

テオム  
 ヤコブ アルバイ  
 の(子)

「カナナイオ」  
 はアラミ語の  
 「熱狂者」

タダイ

タダイ

シメオン 「熱狂者」を  
 呼ばるる

「イシユカ」  
 は「謀叛  
 人」或は「カ  
 ナ」の市民「ミ  
 の義」

19  
 シメオン カナナ  
 イオ  
 ユダ (イエス)を渡し  
 じイシユカリオ

4  
 シメオン カナナ  
 イオ  
 ユダ (イエス)を渡し  
 じイシユカリオ

16  
 ユダ ヤコブ  
 の(子)  
 ユダ 謀叛人と成りし  
 イシユカリオ

十二使徒(マルコ、マタイ、ルカ)

一五三